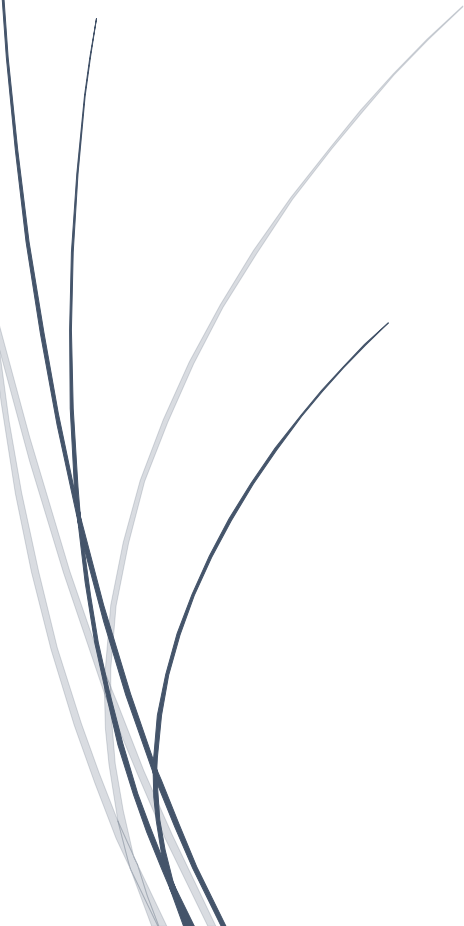




平成28年度

読書会感想文



市立竹原書院図書館

★ 28年度 開催日・課題本一覧表

開催日		書名	編著者名	出版社
4月27日	(水)	春の庭	柴崎友香	文芸春秋
5月25日	(水)	春の夢	宮本輝	文芸春秋
6月22日	(水)	政と源	三浦しをん	集英社
7月27日	(水)	花森安治伝 日本の暮しをかえた男	津野海太郎	新潮社
8月24日	(水)	近代を彩った女たち	若城希伊子	TBS ブリタニカ
9月28日	(水)	ムーンライト・シャドウ	吉本ばなな	全国学校図書館協議会
10月19日	(水)	それでも三月は、また	谷川俊太郎他	講談社
11月16日	(水)	村上海賊の娘 上・下	和田竜	新潮社
12月14日	(水)	梟の城	司馬遼太郎	新潮社
1月25日	(水)	穴	小山田浩子	新潮社
2月22日	(水)	長女たち	篠田節子	新潮社
3月22日	(水)	今年の一冊		

◆ 4月課題本 ◆

『春の庭』

柴崎 友香／著 文芸春秋

時々、この会でも「芥川賞ってなあーに？」という形で受賞作を読むことがある。選考委員が居て受賞が決まるということは、国民的選択ではないからこだわる必要はないのだが、興味は起きる。

今回のテキストは、2014年の第151回芥川賞受賞作である。

最初の数行で、主人公らしき「太郎」が二階に住む女とであう。男がであうのに相手を「女」と表記されると、これは、油絵のような作品かと筋を勝手に作って読み進めた。ところが一向に絵具をたっぷり塗り重ねるような展開にならず、予想通りにならないなあと思っているまま、終わってしまった。油絵より水彩画に近い。

何人かの登場人物の過去を語らせるが、特に交わる時も場もなくそれぞれに流れ続ける。どこかに交差する点をみつけるとすれば、「春の庭」という写真集だ。写真集だから当然形あるものの写真である。その写っている家が太郎の住むアパートの近くであり、冒頭に出てきた「女」がその家の中を知りたがっているという設定で進むので、筋立てそのものは、色彩豊かというほどのこともない。彩を感じられるのは、写真集「春の庭」に写されているその現物の水色の洋館の内装や庭、周りの木々だ。しかしそれも、他が薄い色使いだから際立つだけで、やはり水彩画の方に近い。直感で水彩画と思ったが、写真の表現方法として、油絵と水彩画のような分け方を知らないからのことで、写真家とよばれるアーティストは、きっと写しとった色や形以上のものを見ているに違いない。

〈なんだかわからないがそういう仕組みができてしまってできてしまったからつづけている、延々と続けている、それだけのことではないか〉

〈そうするしくみになっていることを繰り返すしかない。くりかえせなくなったら、少なくとも今の形の自分たちはいなくなる。〉

奇妙な生物の生態になぞらえているが、この作品の淡々とした口調や流れは、人の生をこんな風に一步退いて見ている作者の目を感じる。だが、そう言いつつも、エゴノキにつくアブラムシの共同生活より、一匹に一つの徳利をつくるトクリバチのほうがいいと思う作者のキラッと光る針のような視線も見逃せない。その視線は、離婚や、肉親の死などという亀

『春の庭』を読んで

夏ではなく、秋ではなく、冬でもない。

春の、庭。そして気になっているのは家の中なのに、題名は、庭。

春は、不安定な心持ちがする季節である。

何かが終わって、何かが始まる時。慣れない環境で、ふわふわと落ち着かない毎日。暖かいけど、急に寒さがぶり返す。身体が開いたかと思うと、急に閉じることを強いられる、そんな季節。特に春の夜は危うさを感じる。突然迷子になったような、そんな心細さに似て。それでいて、実は迷子になることを心のどこかで期待していたような。ヒヤヒヤするスリルを味わいたいような、大胆な気持ちにさせる。崖っぷちに立っているのに、そこから飛んで行けそうな万能感をいだかせる気配がある。

春の何とも不安定な空気に、いつも私は酔っ払ってしまう・・・。

そう考えると、題名の「春」は、この物語にしっくりくる感じがする。

(「庭」は何だろう。家の中でもない、かといって、誰もが入れるスペースでもない。外と内の境界線。かろうじて、プライベートが垣間見れるところ?)

著者はいつも見えない世界を意識している。暗渠とか。

今回の舞台は空っぽの家。昔人が住んでいて、今は全然関係ない人が移り住んできて、そしてその人たちも去っていく。太郎たちのアパートも空き家になっていく。取り壊されるために。

人が住んでいる家と、住んでいない家の違いは何だろう。いないのに、人の気配を感じるのはどうしてだろう。人の気配を感じたいと思うのはどうしてだろう。

あったものが、なくなる。場所はあるけど、建物はなくなる。それをくり返し、その上で、人は生きていく。たくさんの生き物の死骸の上で。そして生きている私たちもそう遠くない未来に、誰かの地面になる。

物語は、太郎と西の一人称が入り乱れる。気がつくとも西の話になっており、また太郎に戻る。「」、なんてない。さらにラストでは太郎のお姉さんが、唐突に登場。しかも一人称なのに、その場にいない太郎のことも語り、そして唐突に三人称に戻る。西さんと言っていたのに、次には西と呼び捨てになる。あんなに水色の家に入りたがっていた西はしなかったのに、太郎が不法侵入をする。そして翌日の朝、その家でドラマの撮影が行われている。太郎は外から自分の部屋を眺め、冷蔵庫の豆腐を今日中に食べなければならないことを、思い出している・・・。

あいかわらず、自由奔放で、脳内会議的な書き方である。でも確かに、私も頭の中は、こんな感じかもしれない。シリアスなことを考えながら、今日の夕飯のメニューも考えている。唐突に過去のワンシーンを思い出したりする。時間も空間も軽々と越える。なんの説明もなく。日常生活の中で、心はいつも忙しい。

P 5 5 「一人で静かな道を歩いていると、今暮らしているこの街の風景と、記憶にある生まれ育った街の風景とが、建物の規模や隙間との関係も人の密度もあまりにも違うので、記憶の中の街の方が遠く、他人のもののように思えた」

P 9 0 「でも、このへんにいると、ほかの街のこと忘れるっていうか、ここ以外の場所があるってことを忘れてるって思うことがあります。自分が暮らしていた街のことも」

この不確かな感覚が、いま、ここに、生きていることの実感を失わせる。いま、ここに、生きている実感を、私たちはどうやって？めばいいのだろう。

それはささやかな感覚かもしれない。

P 6 4 「太郎は、足のかゆみに気がついた。この夏、初めて蚊に刺された」

痛みなどの身体感覚が、現実を引き寄せてくれる。

P 4 9 「あの家には、馬村かいこが描いた窓や階段はまだ残っている。そう思うと、一度でいいからそれを確かめたいという気持ちが湧いてきた」

何を「確かめたい」のか。確かめたいのは実際の窓や階段だけではないはず。

過去がそこにあるのかを、確かめたいのではないか。時の流れに流されず、ひっそりと息づいているだろう水色の家の中。過去の空気をひっそりと保存しているはずのその空間を味わいたい。あまりにも物事はめまぐるしく、変わっていつてしまうから。変わらない、微かな気配を感じたい。変わらないものに、ふれたい。変わらないものなどないことは薄々わかっているけれど。わかっているからこそ、感じたという幻覚を、味わいたいのではないだろうか。(C)

昨年度までご一緒していた読書会の仲間の一人がご主人の転勤で、東京に行かれました。(もともと東京の方ですから戻られたというのが正しいかもしれません。)その方から今回の課題本の感想文とともに『春の庭』の表紙の写真に関するいろいろな情報が講師の先生を通して届けられた。

そういえば彼女は、昨年7月の課題本『その街の今は』の時も柴崎さんの本を難解とは思ってはいない風で、「登場人物のような自分もいる。」と話していたのを思いだした。空間は異なっても同一の時間を東京にいる仲間と共有できた。

芥川賞は、九人の選考委員により選考されている。その選者の一人である宮本輝氏は次のように評言している。

「反対意見もありながらも受賞作となったのは、デビュー作から今作に至るまでのしつこいまでの主題へのこだわりを、これまでとは異なる目線に変えたことで明晰になったからだと思は思う。」(引用者注：これまでの作品とは違い)作者の目は俯瞰的である。この大きな変化が、町や建物のあちこちで生きてうごめいている人間たちを読む者に見せたのだ。」

また、同様の選者小川洋子氏は次のように評言している。

「柴崎さんは自分が書くべきものを確かにつかんでいる。それを掌の肉に食い込むまで強く

握り締めている。その痛みを決してこちらに見せようとしないう柴崎さんの粘り強さに、祝福を贈りたい。」

芥川賞は純文学に新しい風を吹き込む新人に贈られることが多い。柴崎さんの作品は、時間が複層しながらすすんでいく。前回の課題本も今回もそうであった。終りになって「わたし」として太郎の姉が登場してくる。では、最初から「わたし」である太郎の姉の視点で語られていたのかと考える。一所懸命に悩み、考えている自分がそこにいても、まったく別のことに身をおくことができる自分がある。外観は変わらないが、そこに住む人によって内装が変わっていった「青色の板壁の洋館」。外観は変わらないが、時代の移り変わりの中で利用目的は変わった表紙の奥に見える建物。「時」は春。一瞬の時のなかにさまざまな「時のながれ」があり、スパイラルに進む時があれば、循環型の時の流れもあるのかと考える。

いずれにせよ忘れてはならない遠い時間もあるようだ。今回も柴崎作品は、私にとっては難解であった。（E子）

街は変わっていく、空地になり、立ちのきになったり、老朽化でこわしたり、マンションが立ったりして行く。

時々、住んでいる人がいるのか、だれが住んでいるのかわからない家もある。この小説では、まあ！素敵な家ねと思うような洋館とそのまわりの人たちの物語である。洋館の間取りと、浴室、庭を知りたくて、関心をいつももっている。しかし、この小説にはストーリー性がなくオムニバスのような感じにうけとれる。

肉体、人生や生活、街、家もすべてはかなく、永遠というものがないものであることを感じた。（TK）

現代の空き家問題をテーマにしているのかと思いきや その予想は見事に外れ、あまりにもさらりとしていて私には何が言いたいのか掴めなかった。

芥川賞選者の評の数々を聞いてこの本の深みが多少理解できたような気がした。

全体を通してなんとなく寂しさのようなものを感じたのは、評の一つ「握りしめて表してない痛みがある」からなのだと納得。

空き家が住人を得たことで、「家が意思をもって動き始めたように感じた。人形が人間になったような生々しさがあった。」という文中の表現が印象的だった。（Y）

◆ 5月課題本 ◆
『春の夢』
宮本輝/著 文芸春秋

読書会の会場には、宮本 輝が参考にしたという『日本の爬虫類』（リチャード・ゴリス 著 小学館 昭和41年刊）も用意されていた。爬虫類は、できるだけ避けて通りたい部類なのだが、今回はそういうわけにもいかない。しかも、他館から借りて用意されたこの分厚い参考書は、蜥蜴の知識をすぐに与えてくれた。竹原書院図書館の知に対する熱意の表れだ。

この作品に一貫して登場する蜥蜴の「キン」が、全体の緊張を維持する役目を果たしている。

主人公の井領哲之は、亡き父親の借金を母と共に背負って貧しい。借金取りに追われながらもバイト学生をやりおおせる。その間に、陽子という恋人ともちゃんとうまくやっていく。筋だけを言えば、作者が様々なハードルを作って井領に越えさせていく話だから、さほど珍しくもない。

一文は短いが行数が多い。もうちょっと削って早く進めてほしいと思う人と、逆にその表現がよいのだと言う人とに分かれた。その上、この人の作品が好きという人とそう思えないという人との好悪がはっきりしていて、対称的な発言が会場を笑いで包んだ。各人の好みの違いを見せるモデルになりそうだった。

ドイツ人の自殺願望者まで登場させて、盛りだくさんのワンプレート料理の様相だが、プレートとなっている哲之、陽子のカップルに加えて蜥蜴の「キン」がなかなか手強い存在になっている。昔読んだことがあっても、話の筋は忘れたが蜥蜴だけは覚えているという印象深い着想だ。

「キン」は春に柱に打ち付けられ、次の春まで動くこともできないまま命ながらえる。いつ死んでも不思議ではない。生きるとは死につつあることという認めがたい現実を真正面から突き付けている。作者が「生」と「死」を主題に浮き上がらせているのはわかるが、その伴走をしているのが『歎異抄』となるから驚いた。

『歎異抄』の解釈にはいろいろある。

〈いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし〉。

この1句をとってみても、井領の脳裏にそらんじて出てくるのは自然な構成とは思えない。どう使っても小説の中のことが『歎異抄』にかかわると、文章は、たたみかけるように一方的で、小説とは別のジャンルのものにすりかわる。そういう時は、作者の顔がまるまる見える。

「どんな御大層なことを書いたり言うたりしても、たったひとりの他人の不幸を救うこともでけへんどころか、自分の肉親の不幸すら解決でけへんやないか」まったくその通りだと思う。その言葉の行き先が、宮本流の『歎異抄』否定に突き進むだけではなく、「なぜ？」と分け入る道もあるのだと、せめて余裕を示せなかったのだろうか。

『春の夢』は「棲息」からの改題だという。暗い色彩を帯びる言葉から明るい春の色に変えたのだと解説者は言うが、春は、酷暑の夏も厳寒の冬も含んでいるのだ。春だから明るいと言われても、ゴワゴワしたものが残るのが生きている中身なのだと思う。

最後は、「蜥蜴」と「釘」と「哲之」の関係性が話題になった。

誰か知らない人から釘打たれてバタバタもがく「蜥蜴」、誰か知らない人に頭を打たれて他者を拘束してしまった「釘」、気付かず釘打って誰か知らない人の自由を奪った「哲之」。この三つの立場はその裏側も考えられる。象徴的に読めば、日常に置き換えられる関係だ。

特段の悪意が働かずとも、こんなめぐりあわせになってしまう関係性の中で、日々大小さまざまな痛みや嘆きが繰り返される。「春」は、去った冬に耐えたればこそ、光と感じられるのだ。

参加者の話が混ぜ合わされて、作品の景色が次々と変化する。読書会のおもしろさだろう。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 愉しみました。この作家が好きな人もいれば私のように「う～ん」と考えてる人もあり……。この本のキーワードは「蜥蜴」と「くぎ」ですね。 (E子)
- ❖ この書き込みを読んでいるアナタは何歳ですか？私は73歳です。この小説は私の青春そのものでした。アナログの時代ですよ！でも筋も単純、文章表現も巧み、あまり重くナイ！是非是非オススメ。(K)
- ❖ 借金の境遇の中で力強く生きていく。くぎにさされたトカゲにえさを与えている主人公。死に対するしんしな見方をきたえさせられました。苦しみの中でもむき合って生きていきたい。やくぎにされたことと、トカゲへの扱いが最後に対比されている。
(TK)

- ❖ あれこれいろいろな事件のおこる作品でした。まあさいごに全てスルーとまるくおさまって良かったね。というだけで、本の中に何か新しい「発見」をしたい私としては、読んでも読まなくても良い作品でした。釘を打たれた「とかげ」と主人公の関係を中心に考えると『春の夢』は『棲息』という題のままの方が良かったのではないかと思います。(N 2)
- ❖ 作者の文章の中から（結果の前には必ず原因がある）これは物理学の基本です。私の心はひっきり、参加者に語り、先生より、その疑問はそこから出発です。1つは人間の存在を説明することと、時間の系列をはっきりさせて自分の立つ位置を決めて下さい。実生活の中にあります。今日は深かったです。(M)
- ❖ 哲之と陽子の青春ラブストーリーとして読んだ。宗教的なところは理解できないところもあったが読みやすかった。沢村千代乃さんの死に顔は印象的だった。(K T)

『春の夢』を読んで

柱に誤って釘づけされたまま、それでも生きていくトカゲは、哲之の未来に明るい希望の光が見えた日の朝、どこかへ消えてしまった。このトカゲが象徴するのは、重荷や痛みを負いながら身動き出来ずに生きていく哲之自身なのかもしれない。重荷や痛みを負いながら 逃げ出すこともできず生きていかなければならない時もある、人間というものを象徴しているようにも感じた。「自分の中に 地獄と浄土をもっている。紙一重の境界線をあっちへ踏み出したり こっちへ踏み出したりして生きている。」という箇所が印象的だった。(Y)

著者の本は10代20代の頃、よく読みました。読みやすく、読後感がよかったのを覚えています。はじめに釘ではりつけられた蜥蜴で、ちょっと引きましたが、今回の本もストーリーは面白く、ぐいぐいと読み進みました。主人公、哲之の若さ故の潔癖さ、ずるさ、身勝手さ。それでいてまっすぐ生きようとする熱さ。10代の頃には感じなかったその熱さが、何だか気恥ずかしいような、懐かしいような。

本の中で、哲之は思います。

「些細な事象を媒介にして、恐ろしい速度で変化する人間の心。そんなおぼつかない心に支配されて生きるのは、なんと馬鹿げたことだろう」

本当にそうです。自分の心は、不確かで、あてにならない。

「釘」の存在が、おもしろかったです。私たちはきっと誰もが、「釘」を持っていて、柱に打ち付けられていて、その枷の中で生きているのかもしれませんが。でもそう感じなかったら、「釘」の存在は消えてしまう。ないも同じです。また、自分自身が誰かの「釘」になっているのかもしれませんが。

ただ何だか読んでいて、全体的に登場人物たちのつながりが少し突拍子もないような印象を受けました。歎異抄好きな友人、突然ドイツから自殺するためにきた夫婦、元お妾の老婦人、ホテル内の権力闘争……。あとがきで著者は「私は、生きようとする闘いを書こう」と思い、未熟でがむしゃらで、潔癖な恋愛を書きたいと思った」と述べています。登場人物たちは生と死を内に抱えていて、テーマは一貫しているともいえるし、読ませるストーリー展開だけでも、何だかいろいろなキーワードをちりばめて匂わせているような印象がぬぐえません。匂いはするけれど、実物がない。もぐる深みが見つけられません。深みの入口かと思って潜ろうとすると、コツンと底についてしまうような……。それは私の深みがないからかもしれません。いろんな材料を使っているけれど、出来上がった料理の味がぼやけている、そんな感じがしました。（C）

家庭環境、事情の異なる若い二人、哲之と陽子の不安や不満を抱え乍らも情熱溢れる青春の日常を描く。

全般を通して出てくる蜥蜴は重要な存在で、哲之が背負っているどうすることもできない父親の借財や母親との別居等の宿命を釘で打ちつけられた蜥蜴の宿命に自分の分身の姿としてとらえ、悩みや思いを語っている。

陽子との紆余曲折はあるが、若者らしい一生懸命さで幸福を追い求める姿は好感が持てる。

「春の夢」の題名のように「春」は誰にとってもこれからの希望や光が見えるもので、最後に釘から放たれた蜥蜴が箱から逃げ出して居なくなっていたのも、これからの二人の自由や幸せや希望を感じることが出来る。

しかし、34、5年前の若者もこんなにもう飛んでいたのだろうか。（YA）

父親からの借金を返しながら生きる大学生の主人公。主人公は、とかげがくぎで柱にささったままでかって、えさを与えている。

ハンデを背負いながら生きていく姿は、勇気があると思う。婚約者や母親、会社での同僚、自殺しようとする老夫婦、それらの人たちの中で、光をみつけて生きようとしていく。

死とは何か、なぜ生きるのかという、仏教用語もでてくる。

苦難に対する向き合い方が大切なんだと改めて感じられました。（TK）

宮本輝さんの著書は、相当数がある。近々のものとしては2015年の神戸新聞への連載小説があげられる。話の展開は面白いのかもしれない。「宮本ファン」も多い。今回の読書会でもしかり。さりながら私は、あまり好きではない位置に属する。少しの作品を読んでこのように思うのも不遜ではある。「食わず嫌い」なのかもしれない。でも、「読書会」の課題本になり『春の夢』に出あえるチャンスがあった。そして、本そのものより、私とは異なる読み取りを仲間の中から得ることができた。これが読書会の醍醐味でもある。(言いたいことを言いました。)

先月に続き題名に「春」という言葉がある。先月の『春の庭』、『春の夢』。春から想像できるのは、明るさや輝き、温かさであり、人であるなら「青春」と呼ばれる時ではある。そして主人公井領哲之は、翌年就職を控えた大学生であり、まさに青春真っ只中。しかし、現実の生活は、亡くなった父親の残した借金の取立てから逃れるために郊外のアパートへ引っ越したところから話が始まる。越してきた最初の夜は、大屋の勘違いから電気が使えず、暗闇の中で過ごすこととなる。そこから、ありえないようなことが起きる。暗闇の中で柱に釘を打った哲之が翌朝見たものは、釘で打ち抜かれたまま生きている蜥蜴だった。哲之は、この蜥蜴を殺すこともできず「キンちゃん」と名付け奇妙な共同生活が始まった。このありえない設定を中心に話がすらすらと展開されていく。(このあたりが宮本輝氏の作品のおもしろさなのだと思う。) この後、取立屋に見つかりひどい目に合う、彼女とのトラブル、『歎異抄』の解釈をめぐる意見の違いから親友と絶縁する等々様々な経験をしながら生き抜いていく哲之君であった。登場人物や事象が多いのは、この作品が雑誌の連載だったことに起因すると思われる。話を貫くものとしての設定に、暗闇の中で柱に打ち貫かれても生きる「蜥蜴のキンちゃん」と「釘」が必要であった。真っ暗な世界のように先の見えないのが人生。蜥蜴は私たちであり、釘はまさに境遇であり運命であろう。しかし暗いことばかりではないのが人生。自分の人生をいかに生き抜くかが問題であることに気づいたとき、哲之君はキンの釘を抜く。まさに青春小説だった。漫画化もされたようである。とにかくビジュアル化される昨今だが、「考える自由」「想像する自由」のある文字による表現のほうが良いと考えるのは、私だけであろうか。(E子)

◆ 6 月課題本 ◆

『政と源』

三浦しをん/著 集英社

〈寄せる川波。初夏の風〉ロケット花火がはじけて飛んで、煙と炎が舞い上がる。年寄二人が角材もって、チンピラ相手に大立ち回り。江戸の名残の運河の河岸に、「ざまあみろ！」。

「政」と「源」。幼馴染が咲かせた華は、二人合わせりゃ146歳。

こんなナレーションが聞こえてきそうなこの作品の幕開けです。

深刻な話にはならないだろうと予感させて、その通りに穏やかに読み終わりました。

読書会の幕開けも、映画にするなら『政』と『源』をどの俳優にしたい？ と、軽やかなノリでがやがやと賑やかでした。

参加者の意見が集中したのは、構成や言葉の巧みな使い方でした。日常のありふれたことについても軽妙な描写が随所に顔を出します。

〈「うちの親父、イチブジョージョー企業で」〉と言われて、〈どこかから水漏れしている企業のように聞こえる。一部上場か、と漢字を当てはめるまでに2秒かかった〉などと表現されて、声をたてて笑ってしまいました。こういう笑いがいくつもあって、作者の術中にすっぽりはまりこむわけです。やがて迎える死にも触れつつ、しかし深追いしないで読者に任せる筆法が、この作者の魅力でしょう。「肩の力を抜いてもいいじゃないの」。そんなささやきが全編から聞こえるようです。

妻も娘も手元から離れ、一人暮らしの有田国政は元銀行員。子供もなく妻を亡くしたのち、年若い弟子を育てる現役つまみ簪職人の堀源二郎。それが『政と源』という題名の二人です。それにしても、つまみ簪職人というあまりみかけない職業を、よくも選んで題材にしたものだというのは、参加者全体の雰囲気でした。

「べらぼうめ！」と威勢が良いのが「源」。身の不甲斐なさを嘆いてひがみっぽい「政」。

二人がであろうと、互いに〈毒づく〉とか〈悪態をつく〉〈まぜかえす〉という言葉づかいで書かれているように、兄弟の子犬がじゃれあって甘噛みを始める姿を連想してしまうのです。しかしそこに〈お金で計れない価値〉を共有している幼馴染同士の解り合いが描かれます。共に、戦争という大事件を経験した73年間なのですから。

夫婦の関係も、「源」が花嫁強奪作戦に成功して得た妻と長くはなかったのですが愛を中心とした展開を示せば、妻と別居することになってしまった「政」は、別居した妻にせつせとはがきを書くラブレター作戦に励みます。

その組み合わせに加わるのが、親方に「はいっす」と返事をする「源」の若い弟子徹平ですが、世代の相違を描きながら、憎悪の世界へ足を踏み入れないので、作者の筆に託す節操を感じました。

年寄にしては元気な「源」と「政」、それに徹平カップルも居るわけで、舞台の上はにぎやかなものです。それだけに、少しずつ時間の舞台が回っていることを忘れるようでした。

おだやかに散る桜の下を、自分も「政と源」の小舟に乗って、「まっ、これもありか」と一緒に運河から川に、そして海へ、それよりもっと遠い所に運ばれていくような心持ちもします。

遠い所は、〈親しい人の記憶の中じゃないか。親しい人の中に生きる。そうだな、それはいい考えだ。〉作者は、読み手を幸せな小舟に乗せて、ゆらりゆらりとひと時を過ごさせてくれました。すぐそばにある死は鞘におさめて船底に。

「また、来年があるさ。来年も再来年も桜は咲くさ。それでいいじゃねえか」。

全く違うタイプを「政」と「源」とに書き分けて、世情を写しながら、三浦しをんワールドの広がりへ誘い込んでいます。机の上に並べられた関連本の何冊かが、参加者の帰りの袋の中に納まっていた。

それに、久しぶりに初めての方のご参加をいただいたうれしい集まりでした。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 「国政」を誰に演じさせればよいか、「源二郎」は？キャスティングを考えてみるのは、おもしろかったです。三浦さんの「資料集めの力」も「ペンの力」もなかなかおもしろいです。（E子）
- ❖ 原作者は三浦しをんさんです。彼女の本はどれを読んでもハズレがありません。今回の作品は1～6に分かれています。イラストが入っているのですネ！ビックリしないで下さい。筋は幼馴染の国政と源二郎の話です。肩のこりがとれますヨ！ とてもオススメです。（K）
- ❖ 「死んだ人間が行くのは死後の世界でじゃなく、親しい人の記憶の中じゃないか」という文章があり心に残った。肉体は終了しても誰かがした事、考えて事は影響し、影響して未来へずっと残っていく、今の私たちの行動は、遠い将来・未来へずっと残っていく。という話が興味深く、私は、死後の世界の捉え方が明るく変わったような気がした。（Y）

- ❖ 生き方の全く違う二人の初老の幼馴染「政と源」の物語。隅田川界限の舟が生活の一部となっている環境や憎むべき人たちが出てこない登場人物の様子が目に浮かぶ。考えや生き方や二人をとり巻くものは悉く対立するが、小さい時から育った年月は奥深いところでいたわり合う心をしっかり根付かせている。
笑いあり、涙ありの古きよき時代の人情ものを彷彿とさせる。
国政がしみじみ思う“水路、運河、海の流れはどこかで合流し、結ばれると”という思いはとても共感する。人々の世界はそれこそ千差万別、それぞれに一生懸命生活の営みを続けて精一杯生きている。読み易い面白い話である。(YA)
- ❖ サラリーマンの政と、自由業的な源。二人の夫婦と老後をとおしてコミカルながらも真の幸せを求めている美しさを感じる。けんかやいいたいことを言い合いながら人を気遣う友達は大切だと思う。(TK)
- ❖ 政と源は70才を生きている人達の配置。今の私達の年齢を表現していたので、私は今までモヤモヤしていた感情が、人生にはゴールも正解も終わりもない、ただひたすら生きる。そして人間は誰かに繋がって、求められていたいし、役に立っていたい。と書かれてある。私もこれなら生きられる。気持もスーとし、救われましたね。(M)
- ❖ 「政」と「源」という対照的な二人を登場させ、幼なじみ、家族愛、ひいては地域愛、死生観を浮きぼりにしている。三浦しをんの文章力、構成力に感嘆しました。年齢40にしてこの表現力に感動しました。(S)

『政と源』を読んで

偶然にも今、小説の舞台となる墨田区の近くに住んでいます。なので、源や政が住んでいる街の雰囲気、何となく肌で感じられます。川と橋の多いこの地域は、下町とタワーマンションが建ち並ぶ不思議な空間の街です。ふと見回すと、人々をのぞき見るかのように、建物の隙間からスカイツリーが、ぬうっと姿を現しています。

幼なじみの源二郎と国政は73歳。職人と元銀行員。正反対と言っていいほど生き方も考え方も違う、気が合わないはずの二人が、「面つきあわせている」のは、「惰性ってやつだ」と、源は言います。(でも、徹平を襲ったチンピラとの喧嘩は、妙に息が合っている感じがしましたが・・・) 同じ時代を生きたもの同士。戦争を経験し、生きていたことを喜びあった仲。細かいことは言わなくても、相手の思いを感じつつ、そばにいる。まるで長く連れ添った夫婦のように。

読んでいて、全体的に、年寄りの表現がちぐはぐで、二人にはあまり年寄りっぽい感じがしませんでした(さし絵のせいもあるかもしれませんが)、とても楽しく読めました。第5章では、国政と清子の夫婦仲は修復不可能と思われたのですが、最後の第6章で変化しま

す。第6章は、国政のかわいらしさに、ニマニマしてしまいました。いくらいろいろなわだかまりがあるとはいえ、毎日のようにラブレターのようなハガキをもらったら、積年の不満を持つ妻であっても、折れちゃうでしょうね。家族とは、何度もその形を変えることができる、再生できるもの、そうして形作っていくもの、なのだと感じました。何だか希望が湧きます。

余談ですが、著者との対談記事で、「伝統」に関して、三浦氏はこんな風にっていました。『「伝統」なんてない。常に「今」を生きている人間が何らかの行いをしているだけ。それを受け継ごうという人が出現しつづけていることがすごいのであって、昔のものがそっくりそのままの形で今も実現されていると考えるのは実態とは違うような気がする』。(C)

対照的な2人。でも幼馴染でいつもひとり暮らしをお互いに支え合っている。言いたいことを遠慮なく言いながらしっかり気遣いを示している所がすばらしい友情といえる。今、人間関係は問題をおこさないようにあまり話さず、忙しくゆっくりお茶をのむ時間もない。気遣う友人がどんなことで助けが欲しいのかさえもわからない。

昔、金曜日の妻たちへシリーズ3「恋に落ちて」というドラマで幼馴染の女4人がいつも集まっては食事をして言いたいこと語り合いながらも相手を気遣っている友情がある。お互いにはないものを持っている違う者同士なのでそこがおもしろい。

サラリーマンと自由業、死別と離婚という国政と源二郎がおもしろい。私は妻として養ってもらいながらきびしい世の中でひたすら働いて来た夫に文句を言う奥さんの気持ちはわかりません。でも国政は謙虚な方で妻に反省の心を伝え復縁コールをする。

三浦しをんさんは、日常の風景の中で感じるさりげない心の機微をよく描いている。そうそう、そんなことを私も感じていますと共感する安心感がある。

また次の作品を読みたいです。(TK)

1冊の本を読み終わった後、次の本への繋がりが横へ広がっていく時と、縦に深く掘り下げるときがある。(もちろん1冊で終わりになるときもあり) 私にとって三浦しをんさんの作品は、どうも後者のようである。読んだ後が毒々しくもなく、だれかに媚びる感じもなく、さらりとしている。でも、作品のテーマに対する取材は、しっかりとなされていることは想像できる。今回の課題本、『政と源』では「つまみ簪職人」を、『まほろ駅前多田便利軒』では「便利屋」、『舟を編む』では「辞書の編纂」、『神去なあなあ日常』では「林業」を、『仏果を得ず』では「文楽の大夫」と、仕事に真剣に取り組む人たちをさらりと語ってくれる。まさにそれは十分な取材に裏付けされたものであるからこそとを感じる。つまみ簪職人という伝統の仕事、若者の担い手がなくなった森林での仕事、伝統芸能に心を動かされる若者、辞書の編纂という派手さもなく根気のいる仕事と、一つの仕事(しかも少数の仕

事) やものごとに真摯に取り組む人たちを描いた作品が多いのもこの作家の特徴の一つである。読書会当日は、これらの本が続編も含め可能な限り中央のテーブルと脇のテーブルに集められていた。いつもながら図書館の細やかな配慮に感謝！

三浦しをんさんの作品には、上記のことと、○家族を描いたもの ○特徴的な関係性を描いたもの ○恐ろしいこと、哀しいことが必ず起こる影を描いたものがある。恐ろしいこと哀しいことが起こる話『むかしのはなし』は、父である伝承文学研究者の三浦佑之氏の影響も大きいと思われる。また〈まがまがしい〉や〈神去り〉といった表現が使われているのは、彼女の言語環境のなかに伝承文学・上代文学との繋がりが、普通にあったのだと思う。もちろん幼少から読書にどっぷりと浸っていたようだ。

今回の課題本である『政と源』には、三浦しをんさんの作品の特徴的なことがすべて盛り込まれている。主人公の政こと国政(有田国政)と源こと源二郎(堀源二郎)は、幼馴染の73歳。国政は銀行を定年退職し年金暮らし、源二郎はつまみ簪職人で弟子もいるというまさに現役バリバリの親方である。二人の幼馴染の老人は、しょっちゅう喧嘩もするが、そのたびに仲直りもする。国政は訳あって妻と別居中で一人暮らし、源二郎は妻に先立たれ一人暮らし。お互い一人暮らしという状況から、お互いを行き来する毎日を送っている。しかし、二人にも影の部分(哀しいこと・怖いこと)が存在する。国政は、大学を出て銀行員として勤めを全うしたにもかかわらず妻子と断絶している自分と学はないが手に職をつけ家族はいなくても弟子や近所の人にかこまれている源二郎を比べて妬み、落ち込む。一方の源二郎は、家も家族も失った東京大空襲の夢を見てうなされる。国政は、「俺の人生これでよかったのか」と独り言をつぶやく。(本文中では、〈ひとりごちる〉と表現している)しかし、二人ともこれらの「影」を隠すことなく生きていく、性格もその生きてきた足跡も異なる国政と源二郎だが、二人の関係は、ほほえましく爽やかに感じられる。

冒頭の「ミツねえさん」の告別式での政と源の会話と、ラストの結婚式からの帰る道すら桜をながめながらの二人の会話が呼応しているように感じられる。73歳という齢は自らの死を意識せざるを得ない。しかし源二郎は、冒頭では〈なあに、大往生さ〉〈それに、すぐに会える〉と、死に対する怖れの増した国政に語りかける。ラストでは、〈俺たちが見られなかったとしても、来年も再来年も桜は咲くさ。それでいいじゃねえか〉と語りかけ、〈たしかに〉と国政も思う。

お互いのことを知りつくした幼馴染とともにこのような境地に至ることができれば、それはそれでよき人生だと思う。老人二人の関係性から労働観や死生観をさらりと語る三浦しをんの世界だった。

映像化するとすればキャスティングをどうするかと会の幕間に考えてみた。国政は、北大路欣也。源二郎は???誰にしようか。粹に江戸言葉を話す役者さん。声のトーンは、火野正平もいいのだが、ちょっと違うかな?文字を通してそれぞれイメージしたことを俳優さんに被せていた。ところどころに古語も綯い交ぜた文章の仕掛けをたのしみつつ、江戸の趣も感じることでできた作品だった。(E子)

◆ 7月課題本 ◆

『花森安治伝 日本の暮らしをかえた男』

津野 海太郎／著 新潮社

花森安治の伝記というより、花森安治の伝説や、知人の描写の抜き書きをしっかりと集めた本という印象が強い。それが、花森安治の特徴と言えるかもしれない。彼が自分で書いた本や文章よりも、伝説になるほど、考えたことをすぐ行動に移して世間の注目を浴びたということの方が彼らしい。そして、その実行力に巻き込まれた著名な人たちが次々に登場して、移り変わる日本の姿をさまざまに表している。花森安治を中心に据えた戦前戦後の文化史というところであろう。

彼は、松江の高校から東大に学び、そこで編集や出版の経験を積んでいく。1933年東大に入学したその時期は、関東大震災後の疲弊からおおよそ10年。風俗への関心が強まった時代でもある。化粧品会社に就職し、化粧品によって女性を変え、ひいては社会までもかえてしまおうと働き始めた。化粧品の広告という〈芸術と日常生活とのあいだにきわどく成立するデザイン領域〉に突き進んだ。

しかし、日本は、戦争への道を着実に拡大していく。だんだん化粧品にうつつを抜かす時代ではなくなっていった。

1937年 盧溝橋で日本の関東軍と中国国民党軍が衝突。

1938年 花森安治は徴兵令状により二等兵としてソ連と中国東北部（旧満州）の国境地帯に送られた。当時、はがき1枚が一銭五厘。まさに その一銭五厘の徴収令状によって命を差し出すこととなった。

その後、結核によって除隊し、1940年、大政翼賛会宣伝部に所属する。

これは戦争を遂行するための国策組織になってしまったが、彼は、言わば時代の最先端のつもりであった。しかしこの行動が、終戦後の花森安治の反戦活動への批判を生んだ。「転向スキャンダル」と言われたが、彼は「一生懸命やったんや」と言うしかなかったであろう。

〈化粧品から戦争まで、なんでも手がける広告人、魂があるかないかわからないが腕だけはあるコピーライター〉と揶揄されることになった。

そして、敗戦の年、若い編集者大橋鎮子と共に、美しい暮らしの理想を生活の全域にひろげていこうと、新しい雑誌『美しい暮らしの手帖』の発刊にたどりついた。

〈いちどころ思うと万難を排して、とことん突進する。〉それを生涯、行動パターンとして貫いたそうだ。『暮らしの手帖』と名を変えた雑誌は、1953年から始まって彼の〈紙の砦〉となったが、1978年描いた最後の表紙画を残して、肉体はその砦から永遠に去った。

『暮らしの手帖』でひととき有名なのが、商品テスト。これは乾坤一擲の大勝負だったであろうが、そのあたりの彼の決心が、本文から十分に伝わってきた。

かつて大政翼賛会で活動した〈執行猶予された戦争犯罪人〉であるという意識が、頑固な生来の気質と相俟って、日常茶飯事の中から戦争に巻き込まれない暮らしを主張し続ける強さの源となっていた。〈戦争への抵抗は、日常を大事にすることだ。〉松田道雄の引用文だが、花森安治の暮らしを大切にすると志とも重なる。

この本の副題は、「日本の暮らしを変えた男」とされている。「日本の社会」でもなく、「日本の世間」でもない。「日本の暮らし」という言葉そのものを全面に押し立てるといって、目線の変革が象徴されている。

読書会の中でも、それほどまで願う「暮らし」の中身は何だろうと考えた。

「みんなが食べていける」という答えが共感を得ていた。ここで言う「みんな」は、日本だけではなく世界中の一人一人のことで、一人一人が「みんなが食べていけるように」と願うなら、戦争は起きないだろうという意見になった。

さて、現在はいかなる渦潮の中にいるのか。過去への70年、未来への70年。戦争の過去は流れ去ったのか。選挙のこと、教育のこと、花森安治の戦後の歩みは、現在を考える起点ともなって語られた。

おりしもNHKの朝の連続ドラマでは、大橋鎮子を主人公にした「とと姉ちゃん」が放映されている。タイミングの良さが話題にはなったが、テレビより、読みにくかったと言いつつもこの本についての話に集中した会合だった。

今回も新しい方が参加してくださったり、出席できない複数の方から感想文をお送りいただいたりして、視点が広がる楽しさを味わった。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 戦争を体験したことが人生の中にすわっている。生き抜く為には矢張り日常の生活が基本とならねばならぬ。そこには女性が中心となるべきと説く。鋭い才能を活かして斬新な国民目線に沿った『暮らしの手帖』が生まれて現在も根強いファンが居ることがうなずける。(YA)
- ❖ 花森安治さんの平和への考え方を、「自分達一人一人が暮らしというものをもっと大事にしたらその暮らしを破壊するものに対しては戦うんじゃないか、つまり反対するんじゃないか。」という記述から読みとることができた。一人一人の暮らしは世の中全体の人々

が食べていける世界を創ること。そして、「戦争反対」と言うだけでなく、自分が毎日の暮らしを大切に言葉豊かに女性の視点を大切に生活していきたい。(R)

- ❖ 花森安治＝『暮らしの手帖』と言う感を持っています。『一匁五厘の旗』という本を読んで涙をした事を久し振りに思い出しました。彼の生き様を知る上で面白い本です。余談ですが文章としては前のめりにはなれませんヨ！(K)
- ❖ 花森安治さんについて。戦後の時代を生きてきて組織・政治に頼らない生き方にユーターンしてきて、女のくらし方、日常のくらし方に重点を置いて生きた方でした。(TK)
- ❖ この先、起こるかもしれない戦争に反対するための土台は、守るに足る一人一人の暮らしであり、女の人が幸せでみんなにあたたかい家庭があれば戦争は起こらなかったという箇所は日頃から感じていることで我が意を得たりといったところ。今日の会の中で、暮らしを大事にすることは、世界の人々が食べていける社会と気付かせて頂いた。(Y)
- ❖ 「どうして大政翼賛会に？」という疑問から読み始めた。正義のためと信じた戦争に負け、自分をかえりみた時守るべきは“私たちの暮らし”だと気付いた。それは彼の母が教えてくれた暮らしだった。これはいつの世も大切にされるべきであることを改めて実感した。また伝記を通して今の視点で過去をふり返ったり未来を見ずえることの大切さも学びました。(S子)
- ❖ 花森のことばにある「私は、確かに戦争犯罪をおかしたが、これは当時無知だったからだ。だからこれからは、絶対にだまされない、だまされない人たちをふやしていく」と。その使命が『暮らしの手帖』にあふれていると思いました。(N2)
- ❖ 「ぜいたくは敵だ！」と唱えていた人が「いつかあなたの暮らし方を変えてしまう」と言えるまでに生き方がかわった「花森安治」。現代を生きる多くの人が自分の今と比較して読んでみるといいのでは？(テレビでよりももっと愉しめます) (E子)
- ❖ 花森安治についてのナゾが少しとけた。才能の豊かさをその時その時、充分に開花させた結果として戦後の思想の変更を理解することが出来た。また、自分の生きている時代を後年の歴史のページとして傍観する必要があると感じた。(K子)
- ❖ 朝ドラ「とと姉ちゃん」と重なった読書会。グッドタイミング。若いころ『暮らしの手帖』はよく読ませてもらった。買った時代もあった。商品テスト(パンやき器 ストープ…)のかずかずと驚いた。「一匁五厘の旗」もいつか読んでみたいと思う。「人はだれでもまちがう。その後をどう生きるか大切…」と。同感。(KT)

『花森安治伝』を読んで

手にとって、表紙の写真にまず驚く。おばさん？おじさん？副題に「日本の暮らしを変えた男」と書かれてあるのを見ておじさんだとわかるが、でもなぜパーマ？そしてあんまり似合っていない？似合っている？……。本文中でも女装についてはいろいろ見解があるようだが、女装というより、注目を浴びるための仮装というニュアンスが強かったようだった。独特のセンス、美意識をもちながら、その根底にあったのは「日本人の暮らしを根こそぎ破壊した戦争への恐れと怒り」。彼は戦後の新しい価値観を「人々の暮らし」に見いだそうとした。「私たちの暮らしのうちに、『守るに足る』なにものかをさがしあて、こんどこそ自力でそれをみがきあげていく必要がある」。再び戦争に巻き込まれないために。

花森が最も心を許した人物の一人、松田道雄もいう。「戦争への抵抗は日常を大事にすることだ。情報が巨大な他の産業に活気をあたえている社会では、新規なもの、センセーショナルなものに、警戒し、のせられないよう平素心がけることだ。平和を守るのに、殉教者のような反戦活動家よりも、ふつうの主婦の日常の生活の尊重に期待するゆえんである」。

あの戦後の混乱期の中で、少数ではあるけれども、日々の生活の大切さ、それを強固にし、土台にしていけば、平和を守ることができると考えた人々がいたことに驚き、嬉しくも思った。しかも生活とは離れているような、男性たちが。生活とは、とても大きい力、社会に影響力を持っているものなのだ。私たちが想像するよりずっと。では自分の日常を大切にすることは、どういうことだろうか。私は、家庭を大切にし、衣食住を丁寧に行うことなのではないかと思う。心地よい規則的な生活を営むことで、人は心身共に健康で、生きる力が湧いてくる。どんなにつらく苦しいことがあっても、生活力の強い人の方が、回復が早い。そして周囲の人を思いやる余裕ができる。

『暮らしの手帖』のあのほっとするようなフォント、イラスト、色あいからは想像もつかないような、花森の強烈な個性と、鋭い視点。彼は本をあまり読まなかったという。「いつもじぶんの体験から出発して考え、ひとりであたり着いた結論を平易な文章でズバズバとするした」。自分で観察し、自分の頭で考えること。当たり前のようなこの行為が、今の時代、難しいことになっていると思う。情報もマニュアルも溢れていて、社会は考える余地を与えてはくれない。というより、まるで考えさせることをやめさせようとしているのではないかと疑う。社会に起こっている様々な事柄を、自分には関係ないという一言で済ませることが、きっと、「日常の否定」に繋がっているのではないかと、私は恐れる。(C)

花森安治という人は、かわった人である。人としがっているから、人としがう事が出来たのです。男の人で戦後食べることが大変な時代に衣装の本を出す発想、商品テスト、なんでも自分でやってしまう。並みの雑誌編集長ではなかった。『暮らしの手帖』三十年間にわたり大雑誌にしたてあげた。同世代の女の人たちのための出版、大橋鎮子の夢にはじまる女性

向けの雑誌から、女性の活力をバネに日本人の暮らしの意識に質的な変換をもたらそうとする生活総合誌への切り替え、『暮らしの手帖』今、NHKの朝ドラ“とと姉ちゃん”楽しみに見えています。人間はかならずまちがう。まちがって終わりというわけではない。まちがったあとどう生きるか。そこにその人間の生地があらわれる。ブレることなく歩きつづけた。おどろくべき持続力である。こんな編集長かれのほかにはいなかった。(M子)

戦後の混乱期が続いている中、出版社を起ち上げ名物編集長となった花森安治の物語。

若い時に目にした『暮らしの手帖』…凄まじいまでの色々な商品テスト、雑誌の持つ娯楽性の殆んど見当たらない少々堅い内容…こういう強い印象があった。

戦争を体験し、デザインを学び、彼をとり巻く人たちとの関係、松江に暮らした日々を軸に「だまされない国民」を目ざして画期的で斬新な雑誌を世に出した。地道で国民目線の雑誌は今も熱心なファンがいるのだろう。エッセイ「見よぼくら一銭五厘の旗」の一箇所の四行が彼の人生の集約ではないだろうか。

「民主々義の<民>は 庶民の民だ

ぼくらの暮らしを なによりも第一にする ということだ

ぼくらの暮らしと 企業の利益とが ぶつかったら 企業を倒す ということだ

ぼくらの暮らしと 政府の考え方が ぶつかったら 政府を倒す ということだ」

日本の暮らしを支えているものは女性と確信。女性の暮らしの中で家族の生活について頭だけでなく体も使って研究してゆく場をつくりたい。これを実現できれば個人としての戦後の自分が、戦中の頭に血がのぼった「民族」や「国民」としての自分に対して立つことができると思ったと述べている。(YA)

ご存知「とと姉ちゃん」の楽しい本と思いきや、前半半分は詳しすぎておもしろくありません。やっと、『暮らしの手帖』がでてくる頃、花森さんの女装についてでてきました。

花森さんの人生感はやはり戦争で戦争の宣伝をしていた自己批判ゆえにこの雑誌である。女性の暮らしにユーターンしていたのです。

TVの中の花森さんのいちがいはりきっているイメージの理由がよくわかりました。

それと奥様がとても裕福な方だと知りこれは意外でした。

政治や団体組織に頼らず *do it yourself* に生きていくようになった花森さんに共感いたします。

もう一つ。間ちがいが悪いことではなく、後でやり直そうとユーターンすることが大切なのです。

私も、残りの人生をユーターンしてがんばります。(TK)

花森さんのすごさは、潜在意識の高さと、その表現能力にあるように思う。

美しいものへの強いこだわりが、激しい性格の中に、悩む力と、忍耐力を持ちいつも目的をはっきりさせながら、人を育てて、次の時代に目を置きながら『暮しの手帖』を仲間と作った。そして、戦後の男の責任のとり方をペンで表現した。

“暮を守る”

私の感激は、女性の地位向上と国や企業も動かす言葉であることがすごいぞ、花森さん有難うございます。

今度は私たちが考え、日々の生活を工夫して生きる番ですね。(M)

小学生に入る前から何となく家で目にしていた『暮しの手帖』について父は「この本は広告を取っていないので信用できる記事を載せているんだよ。」と話していました。この本を読むと今まで知らなかった戦前の花森について詳しく知ることが出来、なぜそれほどまでにスポンサーを付けずに出版することにこだわったのか理解できます。

戦前の花森はどちらかというと俗っぽく、自分の才能を自覚し、自信を持ってふてぶてしいまでに突き進んでいったのですが、戦後は価値を180度変換せざるを得なかったのは他の日本人と同様でした。新体制の大政翼賛会の会員となったものの、後にその翼賛会が国家統一機関へと変貌していっても妻子を養うために賃金を得るために、心ならずも翼賛会解散まで宣伝の仕事をし、人々を戦争に動員する作業を一心にしてしまう。戦地から帰国して日本の実情を見た安森は「国を守るということは、戦争をすることではなく、まず第一に日常の暮らしを守ることである」と考える。「当時無知とはいえ、翼賛会の宣伝メンバーとして戦争に加担したという罪の意識を背負って、これからは絶対だまされない、だまされない人たちをふやしていく。」という花森の決意や「当時の情報産業が新規なもの、センセーショナルなものとして送り込んだものが最初はいいい気分できいているうちに、やがて洪水になって、日常を飲み込んだ戦争へとすすんでしまった。情報が巨大な産業の商品であり、情報が巨大な産業に活気を与えている社会では、新規なもの、センセーショナルなものに、警戒し、のせられないように平素心がけることだ。」という松田道雄氏の言葉は当時情報の中枢で仕事をしていた花森の言葉と重なり、心に響きます。

著者あとがきにある、「人間は必ずまちがう。まちがって終わりというわけではない。まちがったあとをどう生きるか。そこにその人間の生地があらわれる。」

その言葉に花森の生涯を温かく肯定する気持ちがあらわれ、花森を魅力的な人物として、印象づけられました。(N2)

「竹の音」読書会の課題本とNHK朝の連続テレビ小説のモデルが、連続して重なっています。『アンのゆりかご』の村岡花子、その時代の花子たち女性を支援した富豪の広岡浅子

と、番組のモデルが読書会でとりあげられる本と重なっていた。そして今回のモデルは、『暮しの手帖』の創始者であり編集長であった花森安治である。

『花森安治伝』の著者である津野海太郎が、花森にかかわることをあの人はこう評価している、こっちの人はこのようにとらえている、また、花森はこんな言葉を残している。といった業績や逸話から著者・津野が捉えた「花森安治」であり、まさに「伝」である。では、実際のところ花森の思いはどうであったのかを確かめたいのであるが、なかなか花森の文章のまとまったものをつかむことができなかった。（読書会后、何冊かを見つけたので、ドラマが終わるまでには、読んでみたいと思っている。）やはり、読書会。一人一人の読みを聴いているうちに、講師の先生の切り返しのことばや視点の方向付けを聴くと見えてくることができました。

『暮しの手帖』は、1946年に花森と大橋鎮子が刊行した『スタイルブック』を前身としている。『美しい暮しの手帖』として1948年9月に第1号が創刊され1953年12月の第22号から雑誌名を現在のものとした。発行号数は100号ごとに「第n世紀」と区分されている。これには、初代編集長の花森の「100号ごとに初心に立ち返る」という意味が込められている。1946年は、まだ戦争の傷跡がいたるところにのこり、衣・食・住のどれもが不足した状況である。そんな中、大橋鎮子からの雑誌を作ることへの協力依頼に対して花森は、

〈今度の戦争に、女の人は責任がない。〉

〈ぼくには責任がある。〉

〈だから、君の仕事にぼくは協力しよう。〉

と、こたえた。『暮しの手帖』は、ここから始まった。花森が大政翼賛会宣伝部で行っていた戦意高揚の広報活動は、自分の妻と子供との生活を守ることではあったが、後に自身が語っているように、戦争に加担していたことに変わりはないと自戒する。戦地で、職業軍人の中尉から

〈お前らの命は一銭五厘の値打ちしかない。〉

と、罵倒され、人間としての尊厳も奪われることばを浴びせられた体験もあり、本質的に「女のひと」の側の人であった花森だからこそ、「自分には、責任がある。」と言えたのではないだろうか。生き方の方向転換ではなく、脇道、寄り道から本道にハンドルが切られたのだと思う。それは、『暮しの手帖』の編集方針にあらわれている。

「絶対にだまされない、だまされない人たちをふやしていく。」その一つが、徹底した商品テスト。ストーブの商品テストや洗濯機のテストを覚えている。また、一人一人の暮らしを豊かにするための衣・食・住に関する工夫や製作についての特集。今、私が使っている机は『暮しの手帖』を見ながら主人のお手製なんと使い込んで30年になる。この特集が組まれた頃は、経済は高度成長し、人々の暮らしは一見豊かになってきた。が、そのことによる問題も顕著になったころである。花森の社会を見据え、一人一人の暮らしを守り、「だまされな

い人たち」を増やすことを編集の軸としていて、ぶれがないことを今回の読書会で再発見させてもらった。

〈ひとり〉とは〈暮らし〉とは、ひとつひとつの「ことば」のなかに込められた「哲学」を読み解いていく読書会。その場を、時間を共有できたことに感謝です。私の結婚祝いとして、『暮らしの手帖』の年間購読を贈ってくれた友人がいる。彼女と過ごした青春時代、遠く離れての暮らしではあったが、同じ職に就き、妻になり母となった「暮らし」を語っていた。残念ながら今は彼女の声聞くことはできない。でも彼女の贈ってくれた『暮らしの手帖』に再び出会え、改めて彼女がなぜこの雑誌を届けてくれたのかを、彼女との思い出のなかに「聴く」ことができたように思う。

この日の朝ドラでは、唐沢寿明扮する花山伊佐次（花森安治のドラマでの役名）が、女装する件の放送があったようだ。その逸話もスカートを穿いたのではなく、キュロットのようなものであったとか、はたまたスコットランドの男性の身にまとうキルトのようなものであったとか。このようなユニークな逸話の裏に、表現された言葉の中にある花森の哲学に踏み込むことのできた読書会であった。もうしばらく、せっかく見つけた花森安治の著書を読んでもみようと思う。

P S. 今回も文書による参加がありました。それも3名の方です。ひろくそして深く繋がる読書会に乾杯！ （E子）

◆ 8月課題本 ◆

『近代を彩った女たち』

岩城 希伊子／著 TBS ブリタニカ

— 13の光彩 —

1927年生まれ of 著者は、この本に登場する最初の人物「シーボルト・いね」とちょうど100年違いで生まれてきた。この100年は、日本の近代と言われる区分に収まる。

鎖国から一転して開国の方針をとってから始まった近代は、一般的に、明治、大正、昭和の戦前までとされている。近世と近代を大きく変えたものは何だったのか、そしてその変化の中を女性がどう生き抜いてきたのか、この本の著者が描きたかったのは、そのことだろう。

この中では1827年生まれから1896年生まれまで、13人の女性の生涯を、それぞれ約20ページをあてて紹介している。

シーボルト・いね、寺田屋お登勢、樋口一葉、上村松園、相馬黒光、与謝野晶子、泉すず、岡田八千代、渡辺つゆ女、三浦環、松井須磨子、岡本かの子、吉屋信子。

各人の生い立ちや家族関係を詳らかにしつつ、近代という時代を生きてきた彼女たちに共通するものを見ようとしている。

著者が、何度も使っているのは、「日本の女の情緒」という言葉だ。

〈その人でなければ生きられないそれぞれの情緒を生きた、〉と著している。近世の名残にしっかり染まりながら、その「情緒」を近代で花開かせた女性たちである。医学、文学、絵画、演劇というそれぞれの道を歩みながら、近世では光の当てられることのなかった特質を表現し、ヨーロッパの思想や文化の流入と相俟って、男性と共に新しい文化世界を築いていった。

近代を象徴している言葉が各人の紹介文の中に見つかる

〈新しい日本を切り開く人になりたい〉

〈自分を見つめるという近代人の宿命〉

〈不自由な世間の厳しさと文学の中での自由さが同居する〉

〈優しくて静かで強くてすがすがしい大和魂（戦時下の大和魂とは別物）を持つ美しい女〉

〈アンビシャスガールとも呼ばれた複雑でスケールの大きさを持つ魔性のような魅力〉

〈純粹さを追うことしか考えない個性強い文学の魂〉
〈男は女に、女は男に救いを見る〉
〈自立する女を生きる〉
〈燃えるような自我が行き場を失ってとぐろを巻く〉
〈近代は、自己に忠実であることが尊ばれる〉
〈女にとってまことに自我はやっかいな代物である〉

近代は、自我の覚醒をもたらした。しかし、暮らし方がそれほど急激に変わるものではない。多くの女性が、独立して生活を成り立たせやりたいことをやって過ごしていける世の中ではなかった。生活そのものが、至る所で歪みを起こした。この13人の生涯は、近代化の軋みの騒音や悲鳴や勝ち鬨や哀しさを投げかけてくる。類い希な才能と意思力を強い個性とした女性たちばかりだから、確かに近代を彩っているのだろうが、ここに登場しなくても、多くの女性たちが同じように生きていく道を求めていただろう。

近代の女性は「自我」と共に「経済力を持つ」ということも時代の変化を示す言葉としてあげられるという話題も出た。

例会では、「情緒…？」という雰囲気があり、13人の光彩を、この著者一人の言葉にゆだねることなく、読書会参加者の言葉で、登場人物の光や影を追うことにすれば多層の彩りをみることができるのではないかということになり、来月の例会は、各参加者が一人ずつレポートして構成することになった。

〈生きていくよすがとして思い起こしたい女性たち〉を描いたのだと著者は書き記している。現代は、近代を飛び越して存在するわけではない。そこから生まれたもの、形を変えたもの、新しく創り出したもの、それらにもう一度出会ってみる2ヶ月続きの課題である。

文科省の指導要領のおかげで、「アクティブ・ラーニング」という言葉が活字として躍り始めた。「読書会」はその展開図だろう。自発的に参加し、自分で問いをみつけ、参加者と話し合い、図書館利用で調べ、他の人と共同で学びあう。その中でまた自分の問いと出会う。名前がどう変わろうと、読書会は「アクティブ・ラーニング」の基本形だと思っている。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ その道の先駆者、キラッと光る才能が共感を呼び、或いは人生に於いて他人を魅了する人達は、それが女性に限らず私たちは憧れや尊敬の念を抱く。13人の女性達は19世紀半ばから20世紀半ばにかけて活躍し社会の表に出ることが困難な時代であったから大変な苦労があったはず。しかし現代でも女性だからとニュースになるのは違和感がある。未だに女性が社会で活躍するのはたやすくはないということだろうか。(YA)

- ❖ 近代を彩った女たち（13人）を描いています。面白いですよ！是非是非読んでください。この13人の中で貴方（女）は誰が好きですか？一編があまり長くないので一寸もの足りなさもありますが…
お気に入りの人があれば掘り下げるのもいいかも！読書会でも分担して来月もこの作品をやりますよ！（K）
- ❖ その時代の人々例えば森鷗外が色々な人物に関わってきている。小説・文芸・絵画が当時の人々の大衆の芸能を動かしている。貧しくても情熱の冷めない女の人でした。（TK）
- ❖ 男尊女卑の中での良妻賢母が強く求められた時代に、心に秘めた男（ひと）を想いつつ自らのために自らの生き方（小説家、画家等）を追求した女性たちの生きる姿にすい込まれていく。
「日本の情緒」とは何なのだろう。現代からみると「情念」にも見えてくるが…（S）
- ❖ 強烈な女性たちが、歴史の中で苦しみ、表現し、相手の心をゆさぶりながら、生きた近代という時代。私達現代はあまりにも与えられた自由の中で、又、自由に生きたいともがいている。こうして形を変えて悩むのが人間なのですね。（M）
- ❖ この13人の女性達は生命をかけてそれぞれの情緒に生きた人達だった。逆境や不幸な出来事も情念で乗り越え、思いを貫く強さがあったからこそ近代にさまざまな歴史に名を遺したのかもしれないと思った。（Y）
- ❖ 明治維新前後、激動の世の中で、様々な立場で力いっぱい自分の生命をかけてエネルギッシュに生きた13人の女性達。どの女性も自分の考えを1本の真の柱としてもち、相手に貫こうとする。その力が時代をも変えていっている。日本人が昔から引き継がれている”情緒”この言葉をキーワードに現代の女性の生き方に示唆を与えている内容の濃い一冊でした。（R）
- ❖ 外国を含め広範な意味の外からの文化を受け入れるようになった近代。その時代に生きた女性13人に「恋文」を著した岩城希伊子。現代はあまりにも自由すぎる若者達は本物の恋すら求められなくなっていると苦言を呈して、「情緒」をテーマに近代を彩った13人を語っていた。（E子）
- ❖ 作中に13人の近代女性が登場するのだが、各々が持っている情緒。情緒はプラスの印象だったのだが本書を読んで、プラスのみでなくマイナスの感情も引き起こされるのだと、つくづく感じた。（N2）
- ❖ 近代も近世も考えないで読んだが、皆さん深く読まれていて感心した。上村松園さんのファンが多いのに驚いたが、私もここで松園さんの画集を出して読んだことを思えば、一番心に残った人だったと思う。（KT）

『近代を彩った女たち』を読んで

明治から昭和に至る13名の女の生き方。さまざまな女の人生があった。ここにあげた13名の女性たちは近代に生きたそれらの女のなかのほんの一握りの存在である。作者が、今後何かの折に生きていくよすがとして思い起こしたい人たちなのである。現代は、あまりにも自由すぎるために、日本の現代の女は個性すら失いつつある。どんなに時が経っても、空も山も川も変わらない。心のどこかにひそんでいる日本の情緒を活かしていきたいものだ。この13名の女の中で岡田八千代の一生に、自分と似た自我を思う。それぞれに自分に生きた女たちである。(M子)

シーボルト・いね から始まって、吉屋信子で終わる、近代日本の歴史をたどるような、この長い長い流れ。一人一人の生き方が強烈で、読み終わった後は、なんだか頭がクラクラするような、濃厚な内容である。まるで、薄めずに原液のまま飲んでしまったような。どの人物も一冊の本が書けてしまうような人たちだから、尚更である。さらに内容はその人物に留まらず、関わった人々のことや、その作品、思想に至るまで、若城氏の考え、解説がふんだんに盛り込まれている。氏の知識の広さ、深さに感嘆する。だから読んでみると、口語訳の与謝野晶子の源氏物語を読みたいと思ったり、蝶々夫人の話を調べてみたり、「ある晴れた日」を聴いてみたり、『にぎりえ』を読んでみようとしたり、吉屋信子の『底のぬけた柄杓』を図書館に予約したり、新宿中村屋ビルに行って、礫山の「女」を見に行こうかと調べたり……。知的好奇心を刺激する本である。だからなおさら濃厚で、読後は疲労感があるのだろう。

はじめに、で若城氏は「これは近代日本の女性史というよりは、私のささやかなこの人たちへの恋文」だと述べている。その通りだと思う。恋い焦がれ、こんな風になりたいと思った人物を並べている。ベタ褒めに近い。そして、「私の恋は、この女性たちのなかに燃えている日本の女のもつ情緒というものについてなのである」。文書の中に度々出てくる、「情緒」。「情緒」とは一体何だろうとあらためて考えると、よくわからなくなる。まるで、「品格」という言葉のように。以前、明治生まれのおばあさんたちと関わっていた頃、いつも彼女たちに共通するものを感じていた。一本芯のある感じ。あれは何だったのだろうと今でも思う。カッコよかった。どんなに呆けていても、軽々しくあしらえない雰囲気を出していた。あれも情緒に繋がっていくものだったのだろうか。

固執する自分から離れ、相手を思いやる気持ち。我を忘れて、微かな自然の移ろいを感じるその感覚。その時に、情緒は生まれ、そして育まれていくような気がする。

13人の人物の中で、私が一番心ひかれたのは、渡辺つゆ女である。本当はとても誇り高いのではないかと、内に秘めた思いを表に出さないのは、それははしたないことだと思ってい

るのではないかと、いろいろ想像させる。彼女の句をもうちょっと知りたいなと思う。
(C)

ここに載る13人の女性達が活躍したのは19世紀半ばから20世紀半ば。戦前、戦後のまだまだ女性の社会での活躍が困難な時代にキラリと光る才能を発揮して世の中に出た事は素晴らしい。

私は絵、特に洋画が大好きであるが、日本画の松園の「序の舞」を見た時は、こんな美しい絵が描けるのだろうかという衝撃を受けたことを覚えている。一体いつ何処の美術館だったろう。今回本で初めて知ったのだが師と仰いだ鈴木松年との子供を授かり、早くして死なせたこと、松年が鈴木派という絵の祖鈴木百年の息子であること。この時代に頭角をあらわした女性は、何れの女性も結構内に激しい燃えるものを持っていること。ネットで見るとどの絵も日本古来の日本女性の美しい立ち居ふるまいが全身に溢れ出て、かつら、着物に至るまで釘づけにする魅力がある。息子の松篁から現在活躍する孫の淳之に至る三代の日本画家として今なお沢山のファンを魅了している。(YA)

近代を知り現代の生き方に繋ぐ「調べ学習」へ 図書館スタッフとともに創る読書会

今月の読書会では、集められた関連本の数に感激しました。図書館の書架からはもちろん、バックヤードに所蔵されているものや、県立図書館から集められた本など相当な量でした。それらは、部屋の中央テーブルと、講師の先生の後方にずらりと並べられた長机の上に、並んでいました。それも課題本で語られている13人の人物の登場順に並べられ、中央のテーブルには、13人のバックボーンが、明らかになるような年表や近代の社会情勢や文化などに関する13人に共通する本が集められていました。それこそ会の途中でも知りたいことがあればすぐに調べられるようなセッティングで、最高の「読書会の環境」が用意されていました。

会の初めに「近代」について共通理解を行いました。つまり近代とは、明治維新から戦前（第二次世界大戦）とし、近世との違いもおさえました。一応、同じ土俵に上ったつもりでも捉え方には、個性があります。10人集まれば十通りになるのは当然のことですが、そこからまた別の人生が見えてくるからおもしろいのです。参加者のみが味合うことのできるたのしみを含んでいます。今回も次への繋がりを見通しながら話がすすみ、愉しませてもらいました。

本の構成は細やかな調査が可能であった人物と、資料や本人の描いたものが特にない場合のような表現はおのずと違いがあります。そこには、作家がイメージを膨らませ、小説仕立

てで書かれているものもありました。明治維新から大正を経て昭和に至る近代は、わずか百年ほどですが、衣・食・住といった基本的生活を根底から覆してしまったのですから、女性の生き方も大きく変わったのも当然のことです。ペリーの来航以来、外国の影響でその重い扉を開いた日本が、吹き込んで来た文明開化の風を取り込みながら急加速で日本の近代化は始まりました。

母や妻や娘は、日本を急速な勢いで近代国家へと育てた男たちを、助け、力を添えていきました。それまでの時代と違い〈ひとりひとりで生きる〉ことから〈全世界へ飛び立つ〉自我に目覚める女としても成長していきました。ひとりひとりが自分の力で精一杯生きることが悟っていきました。当然のことながらひとりひとりの相当な努力によるものでもあったことは否めません。際立った女性もいましたが、激動する歴史の陰に隠れてしまっている自我に目覚め、しかも「情緒」を失うことのない女性に目を向けたのが、筆者のように思えました。その中からさらに若城希伊子さんに強い「恋心」を抱かせた13人の女性が描かれています。〈今後何かの折に、生きていくよすがとして思い起こしたい人たち〉であり、表現されている言葉は、それぞれの女性におくる〈恋文〉であると表現されています。13人への恋心は、このひとりひとりのなかに燃え滾る「情緒」であるが、現代の日本には「情緒」が枯渇しているとも指摘しています。本来の男と女の役柄は古今東西変わるものではない。つまり「女は男によって生かされ、男は女によって育てられ、男女の間には情が生れ、お互いに相手に自己を捧げることで愛を生きることができるのだ」と。そして13人の女性は、近代というこの百年の間に自己の生命を賭けて情緒に生きた女性で、文学であったり芸術であったり、生き方そのものであったりと自己を表現している女性たちを岩城さんの「選考眼」で選んでいると思われます。それは女性であることを誇示するものでも、男女同権を勝ちとるために生きたのではなく、それぞれの人生をそれぞれでなければ生きられない「日本の情緒」を生きた女性として描かれています。しかも「近代」が、徐々に拡張されていく足跡も感じられる人物配置でした。それは、それぞれの女性とかかわる男性の生きた年代を意識した取り上げ方ではないかと思えます。最初に登場する人物は『シーボルト・いね』です。鎖国にあった日本が、外国に向かって開いていた唯一の地は、長崎の出島でした。いねは、その出島に出入りすることのできた遊女「其扇」と外国人医師シーボルトを父とする日本で初めての女医として本の最初に取り上げられていました。

二番目に取り上げた女性は、「命を賭けて竜馬を助けた」との冠言葉のついた『寺田屋お登勢』と続きます。深い「情」によって歴史を動かした男を支えたその生き方を伝えられたように思います。同時に激動期とかわりない危険をはらんだ「平和」で「平等」な現代と見比べてみることを「情緒の枯渇した日本」の表現で示唆された感がありました。

あと11人の女性が続きますが、私の中では、「竹の音読書会」の特色にならんとするところの「調べ学習」へと繋がります。まさに、「アクティブ・ラーニング」の始まりです。「だれを深く読み解くか」の争奪戦(?)があったのか、なかったのかは参加者のみぞ知ることですが、参加者も「情」をもって自分のテーマを選びました。この本を読み解くキー

ワードは「情緒」だと思います。岩城さんの表現した「情緒」がどのように読み解かれ、ライトされるか来月の読書会も楽しみです。

その本の感想を言い合うだけの読書会ではなく、自分から次の本を掴みにいく、まさに「アクティブ・リーディング」です。それができる「環境」を整える図書館の役目を、しっかりと果たして頂ける図書館のスタッフにも感謝しています。まさに「書院」を冠した図書館です。 （E子）

◆ 9月課題本 ◆

『ムーンライト・シャドウ』

吉本ばなな／著 全国学校図書館協議会

9月は2本立ての豪華版

毎月1冊の本をテキストにすることをスタンダードにしているが、9月は、2本立てのデラックス版となった。それというのも、前月の『近代を彩った女たち』に13名の女性が登場し、それぞれの彩りが興味深くて、参加者が深掘りをすることにしたからである。それに最近の名前をつければ「大人版アクティブラーニング」というところだろうが、従来的に言うところ「大人版調べ学習」ということになる。それぞれのレポート発表は後半に回し、いつものように、まず、今月の課題本から始めた。

吉本ばななの作品は、参加者全員がこれまで読んだことがあって、驚くような作風ではないと思われている上に、学校図書館協議会の集団読書用に使えるテキストだから、あまり極端な表現はないだろうと、安心して読み始めた雰囲気があった。

この作品の題名もカタカナだが、2ページ目の作者紹介欄に〈スピリチュアルなエッセンスが散りばめられている〉とカタカナ混じりで書かれると、どんなスピリチュアルなものが〈ちりばめられている〉のかと、言葉の整理をしてからとりかかることになる。

「ワタシ気が変なんでしょうか」

恋人をなくした主人公「私」に、恋人の弟「柊」が、ふざけて言った言葉だ。

「私」の恋人は自動車事故で突然なくなり、「私」は、息の根が止まるかと思うくらい苦しんだ。「柊」は、その事故で、兄とその車に同乗していた自分の恋人を同時に失い、それ以後は亡くなった恋人のセーラー服を着て登校している。

こうして、「私」も「柊」も、死による喪失感を納得できないで居ることが読者に伝えられる。しかし、二人とも、それぞれにその死を受け入れていくスピリチュアルな体験をした。その体験を二人が確かめ合ったとき、「気が変なのか」という「柊」のふざけた言葉が出てくる。気が変だと読者が受け取るのか否か。喪失感を埋めて立ち上がるときに働く様々な出来事、分析も説明もできない何か。読者が各自の体験に応じて言葉を絡ませて理解するしかない。

〈光の中でたくさん笑った〉という二人の立ち上がり方を、若い柔らかさって良いなと思う。例会でも、この結末には、年齢から来る読み手の反応の違いがあるだろうという意見が出ていた。

この作品では、どこからか、読み手の中にも光が射してくる。悲しみを変えることはできないが、超えることはできるのかもしれない、と。

〈私は行きます〉というセリフが眩い。

続いて、前月の『近代を彩った女たち』の登場人物の中から、参加者各人が一人ずつを選んでレポートする第2部が大いに盛り上がった。工夫を凝らして作られた関係年表から始まって、途中で手作りのお菓子やお茶でエネルギーを補給しながら時間延長の大報告会となった。

市立竹原書院図書館の資料はもちろん、あちこちの図書館、文学館、美術館を巡ったり、インターネットから情報を得たりして、このレポートを書く間が至福の時だった、という感想も出た。遠隔地からのレポート参加もあって、内容に豊かさが加わるのも、この読書会の特徴と言える。

日本が大きく動いた明治維新からの近代は、名の挙げた女性でも、しんどかったこと、くやしかったこと、男性との壮絶な関係性の構築に辛酸をなめたことなどは、詳しく調べれば異口同音に語られる共通する部分である。

持って生まれた才能もあるだろうが幸運を引き寄せる感性と強さ、個性を武器にしてお金や職業の奴隷にならない生き方、なにものかになろうとする意思、細やかな心配りの中で芸術家としてのあり方を貫き通す一生、夫を支えまたは兄を支えながら見返りを求めず日常の中で自分の表現を残した人などが、レポートとして生き生きと語られた。知らなかったエピソードも数多く出てきた。

このような「調べ学習」をすると、これまで歴史上の遠い存在だった人物が、発表者の隣の住人になって親しい人になったのではないかと思う熱を感じた。一人親しい人が増えた、そんな満足感をもって散会したように思う。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 亡くなった人への人恋しさをしみじみ感じる吉本ばなな。スピリチュアルなエッセンスを感じる。私も水筒とティーバッグを持って思い出の所に行って飲みたくなりました。(TK)
- ❖ 月影について色々の思い、感想を聞かせて頂きながら、月は光を反射、影は吸収、夜中に死者と生き、かかわる人間が両方からはなつ物も含め、たち直っていける精神をさわやかに感じさせてもらえた。(M)

- ❖ この川は三途の川だろうか。その日、その時間になると、深い思いを残した愛しい人と会うことができる。混沌としてなんとロマンチックな立ち直り方。作者の若々しさと現代っ子の姿が全て格好良い娘、格好良い息子が主人公なんだなあ〜と。しみじみ最近の小説は……と思いました。(N2)

- ❖ 作者は“生きることの悲しさ・苦しさ”をどうしてこんなにも深く感じているのだろう。最愛の人を不慮の事故で亡くし、息の根も止まるほどの喪失感が淡々と、切々と、語られる。そのどん底で喘いでいる主人公さつきのところへ、ある女性うらがが不思議な世界へといざなう。それは百年に一度の見もの、七夕現象（ブロッケン現象か？）。青い夜明けのかすみの中で、この世で生きているさつきと、黄泉の世界で生きる最愛の等が、遠く離れて見つめ合う。居ないと思ったけれど「等が居る！」と悟る静寂の世界だ！
一連の七夕現象の月影が、薄れゆくまでそっと見守り続ける。
朝日が昇り始めるとともに、次第に彼の死を受け止め、前を向いて歩き始める。さつきもうらかも。そして何故か読者も。読後の清涼感がたまらない。(S)

- ❖ 吉本ばななの本が好き、ということで参加しましたが、今回は行く前から「どんな話がみなさんから聞けるんだろう」とわくわくしていたのが大当たりでした。今、私が聞くべき話が聞けました。ありがとうございました。(MM)

- ❖ 「吉本ばなな」の小説はいずれもいずれもハズレがありません。今回も文章表現の巧みさ、構成のうまさ、脱帽です。
9月28日の読書会はプラスアルファとして前回の13人の女性を掘り下げました。13人をそれぞれが受け持ちました。私は上村松園担当でした。掘り下げることの楽しさを知りました。他の人もそれはそれは大作ばかりですべて小論です。お見せできないのが残念です。(K)

- ❖ 恋人・等を失ったさつき。その痛くてやるせない悲しみを乗り越えようとジョギングをはじめ。早朝のジョギングの情景はツーンと張りつめた早朝の空気、川の様子がとてもイメージしやすくきれいな文章でした。
夜明の暗い川面の情景が前半に来て、百年に一度見られるかどうかかわからないという、死んだ人にあいたい一心での川面の思いを、ブロッケン現象というすばらしい自然現象と重ねている所が、作品に対してすごく共感できるものになった。最後に“春のあたたかい午後”という文章で読み手の落ち着きを誘っている。
私自身も20歳の時、父を突然失いました。父の死の朝、大きな虹を見た時、父は虹になったと思いました。初七日、二七日と節目の日には必ず虹が出たので、私は虹と話すようになりました。
人間の力ではどうしようもないことも、自然の力から不思議な力として故人と向き合えることが出来た私の体験。ムーンライト・シャドウと重ねて読みとることが出来、涙がと

まりませんでした。

後半は調べ学習の発表でしたが、皆さん熱心にレポートされていてびっくりしました。皆さんの思いは、めまぐるしくゆく時代の中で、一生懸命、自分を表現して生きてきたということ。今の自分はどうかろう？と振り返るよい機会になりました。(R)

- ❖ 吉本ばななの作品は、昨年に続いてでした。大事な人を失った人間が、いかに立ち上がるのかを、強いるでもなくゆっくりゆっくり再起していく若者を描いている。最後の言葉は……。是非とも読んでほしいです。「ありがとう」を。
そして先月からの宿題発表会。『近代を彩った女たち』から一人ひとりの調べ学習を発表しました。参加した者のみが感じることでできた至福の時でした。(E子)
- ❖ 『近代を彩った女たち』の中から読書会のメンバーが調べたこと、感じたことを向きあえたのは、書物からだけの印象と又違って、深く知ることができ、大変興味深くおもしろい時間であった。私自身調べるのは大変だったが、調べを通して深く一人の人物を知ることができ、よい機会を頂いたと感謝。(Y)
- ❖ 物語の設定が非常に重いがガラスのような繊細な若者たちにのしかかる悲愴感とは逆に柔軟にしなやかに生きてゆき、何ともファンタスティックな物語である。
喪失感を乗り越え希望や将来に向けての明るさや若者のさわやかさが出て、読後が清涼感やさわやかさが受け取れる。ムーンライト・シャドウは生きていかねばならない者、死んでいった者たちの織りなす人間関係なんだろう。両者の生き方が、あいまいさが、ファンタスティックなのだろうか。(YA)
- ❖ 恋人を突然(交通事故で)失った悲しみ苦しみを乗り越えようとする短編。いつも思うことであるが、先生やメンバーの感想を聞けることが参加することの一番の楽しみ。前月の調べ学習もそれぞれ個性的ですばらしいと思った。(KT)

『ムーンライト・シャドウ』を読んで

月光、陰、相反する言葉の題の短編小説ですね。学生時代の時に出会った、衝撃的な交通事故の為に、大人になっても立ち直れない心を引き摺って暮らしていた女。何故かジョギングをする。人は思いがけない行動をこすことがある。

女は、心のモヤモヤを晴らしたかったのかもしれない。

忘れたかったのかも。私は22歳の頃交通事故にあいました。外車と、こちらは軽自動車と正面衝突でした。その時のこと今も覚えていません。一時的記憶喪失となりました。54年過ぎても思い出しません。人はあまりにも激しいショックを受けると、自分を守る為に一時的か一生か防衛機制がはたらくのでしょうか。一生でなくて良かったです。

この主人公も亡くなった人と別れが出来たので、新しい人生が送られるのでしょうか。比喩的です。（M子）

小学生の頃、友達とマラソンの自主練習をした。冬の早朝だった。待ち合わせの公園に一番に行って、友達を待っていた。まだ日が昇る前の暗い中、木製のジャングルジムの上に登って、微かに明るくなっていく空や公園を見下ろしていた。そこは私の知らない空間になっていた。誰もいない公園は、何かの気配がして、ちょっと怖かった。『ムーンライト・シャドウ』を読んでいて、あの時の空気の匂いを嗅いだような気がした。

物語には2ヶ月前、恋人（等・ひとし）を交通事故で突然失った、さつき（20歳位）が登場する。その事故では、等の弟（柊・18歳）の彼女（ゆみこ・18歳）も同乗していて、一緒に死んでいる。さつきと柊は、かけがえのない相手を、一緒に、一気に失った。抱えきれない悲しみにがんじがらめになったさつきは、早朝ジョギングで、柊は死んだゆみこのセーラー服を着ることで、突破口を見出そうとした。さつきは思う。「大丈夫、大丈夫、いつかはここを抜ける日がやってくる。」その悲しみ、苦しみの日々をのたうち回っているとき、さつきは、うららという不思議な人と出会う。そしてある不思議な現象を体験する・・・。

さつきがジョギングという手段を用いたことは、おもしろい。走るという行為は、何かから逃げる、何かに向かって行く、と両方からみられるからだ。

初め、さつきは等の死、等の永遠の不在という事実から、逃げようとしていた。あまりにも大きくて、現実として認められない。認めたくない。だから走って、逃げていた。でもこのままではいられないことも、薄々わかっている。彼の不在はおかしくなると思うほどに苦しいことだけれど、その一方で、それでも少しずつその事実慣れていく自分を、微かに感じている。「真昼にこうしてふと思い出しても、泣かずにいられるようになったことが、妙にむなしい。果てしなく遠い彼が、ますます遠くへ行ってしまうように思える」。そして不思議な体験をして、この悲しみから走り出すこと、おさえきれない衝動一明日をめざして走り出すことを決心する。「等。私はもうここにはいられない。刻々と足を進める。それは止めることのできない時間の流れだから、仕方ない。私は行きます」。

愛する人を失ったとき、その悲しみや苦しみに生きていく勇気を失った心、傷ついた心は、どうやって回復していくのか。よしもとばななさんはそのことをとても丁寧に書き綴っていると思う。その文章には、苦悩している人のそばで、じっと黙って背中をさすっているような、いたわりを感じる。読んでいて、少し、癒やされる。

拒絶していた悲しみを、自分の中に通過させることができれば、それはきっと、共に過ごしたかけがえのない日々の、すばらしい思い出だけが、形残るような気がする。川の流れてきれいに丸くなった、川底の石のように。さつきは不思議な体験をしたことで、悲しみを、つるつるの大切な石に変えたのだと思う。そしてきっと、そんな風になったものなら、受け

入れられる。それはその人の体の一部になり、意識しなくなる。人はきっと、そうなるようにできている。人によって、時間はかかるかもしれないが、きっと、そうできている。生きていくために。

さつきは思う。「流れる川を見つめながら、生きねばなりません」。(C)

いつも不思議な雰囲気な吉本ばなな。愛する人が突然亡くなった後、ジョギングをしてのりきろうとしていたら、うららという人があらわれて来る。風景とか風・季節でさびしさ・情感をあらわすばななさん。気持ちが肌で感じられる気がしてくる。私もティーポットとティーバッグをもっていろいろな風景の所へ行って飲みたくなってきました。

みなさまは、たくさんの本をよんで、本人の気持ちをいろいろ黙想して考察されていました。いろいろな人生をのぞくことは楽しいこともあります、自分の生き方に教訓を取り入れることができます。参考、勉強になりました。(TK)

「ムーンライト・シャドウ」と

「それぞれの女性の月影」を探る二本立て読書会

今月は、よしもとばななの『ムーンライト・シャドウ』と先月からそれぞれ分担した「近代を彩った女」と若城希伊子さんの目で選んだ人たちについて調べたことの発表会と二本立て、2時間半の至福の時を過ごすことができた。

よしもとばななさんの、『ムーンライト・シャドウ』は卒業作品として書かれたものだ。この作品は学部長賞をとった作品で表現力のある作家だ。昨年度は『さきちゃんたちの夜』を読んだ。よしもとばななは、もちろんペンネームだが、重苦しい気分は名前が影響しているとの占いから漢字からひらがな表現に変えたとの話もある。私生活では、困ったときには占い師とかその道の人に尋ねること、落ち込まないことを心掛けている人のようなのである。その作品の読後感も爽やかであるが、私生活もクヨクヨせずに自分で暗闇から抜け出す方法を見つけていくことのできる人のようだ。この作品のなかで「ムーンライト・シャドウ」について「月」と「影」と読むのか「月影」として読むのかの問いかけがあった。「月影」として捉えるほうが、作品全体を捉えられるのではないだろうか。そして作品の最後に「澄む」という表現がある。人の時間の流れを川の流れにかぶせた「澄む」である。文章のなかほどにはすむを「透む」と表現している。漢字からイメージすることができる心理描写のうまさを感じた。でも「月影」がまだ心に残り、青山俊董尼の〈くさぐさの葉末（はずえ）に宿る白露の一つ一つに月影の澄む〉という歌を思い出した。よしもとばななの死生観と見えない

ものをいかに見させるか、しかし、けっして肩に力が入っていないことに読み手は爽やかさを感じるであろう。

よしもと作品に負けないぐらいのパワーのこもった二部であった。先月割り振られた一人一人の人物を調べつくした発表は圧巻でした。一冊の本が繋がる繋がる……。近代を彩った10人のなかに「日本女性の情緒」を見出した若城氏。現代には枯渇している「情緒」を一人一人が探っていく「本にのっての時間旅」で、上村松園にも三浦環の文化・芸術の世界で生きた女性。市井の中で維新を支えた寺田屋お登勢、不遇な一生であったが日本の医術に貢献したシーボルトいね等々。「月の影」ではなく月影であったと思った。

この「作品」はまさにこれからの学校教育が取り組もうとしていることではないかなと。ちょっと先行く「竹の音」読書会、このように楽しい時間を共にできることに乾杯！！
(E子)

吉本ばななファンなので参加させていただきました。

見えるもの、見えないもの。見えないものを信じる私にはある参加者の話に心うたれました。それと同時に、みなさんいろいろな経験をされているんだなあと。

辛いこともしんどいことも経てのその輝きか、と感じました。そう考えると「いろんなことを乗り越えていってやるか！」と思える力をいただきました。みなさんの歳になった時にどれくらい素敵な人になれているのか？！楽しみです。

今回は短編だったこともあり、『ムーンライト・シャドウ』のことは時間短縮で、その後に行われた先月の課題本からの個人レポート発表が素晴らしかったです。

各人のまとめを読んだだけでも1人1人の女性の人間的魅力が伝わってきましたが、それぞれ担当の方の発表も熱くて良かったです。資料もいただけてお徳感いっぱいの会でした。

ありがとうございました。(MM)

◆ 10月課題本 ◆

『それでも三月は、また』

谷川俊太郎 他／著 講談社

紡がれ、語られる3月について

この本の発行は2012年、それも間もなく3月になろうとする2月24日である。その1年前の3月には、何が起きていたか。

2011年3月11日。東北地方、特に太平洋側の地域では大地震と共に津波におそわれた。その自然災害では多くの命が失われてしまった。あれから5年半も過ぎるのに数千人の行方不明者が報じられている。数え切れない様々な命の喪失があった。だが、それだけではなく、東京電力福島原子力発電所の損傷という事故が起きている。地球の活動という誰にも止められない災難とは違う種類の災いが起きたのだと知ることになった。

この本には、谷川俊太郎、多和田葉子、重松清、小川洋子、上川弘美、上川未映子、いしじんじ、J. Dマクラッチー、池澤夏樹、角田光代、古川日出男、明川哲也、バリー・ユアグロー、佐伯一麦、阿部和重、村上龍、デイヴィッド・ピースという17名の書き手が登場する。

そのうち、この本のために書き下ろしたのは10名である。残る5名も、それぞれ2011年5月から9月までに初出が見られる。その他サイトから2名で、あわせて17名全員の文が、あの年の3月から1年以内に書かれたものだとわかる。しかし、内容は、過去から未来にまでおよんでいて、今、目の前に見える悲惨や悲哀を記しているわけではない。

図書館に資料提供をお願いした『東日本大震災 報道写真全記録 2011. 3. 11 - 4. 11 (朝日新聞社・朝日新聞出版)』などの写真や記録が13冊机上にならべられて、それらの本の方が、ビジュアル的にあの日についての恐怖をよく語っている。参加者は、その13冊に圧倒され、手元に引き寄せかねて表紙たちを無言で見ている。冒頭の谷川俊太郎の詩「言葉」の中にある〈沈黙〉が雄弁であることを目の当たりにする光景だった。

原子力発電所の廃炉まで、待つことのできない現に生きている私たちの立場を語った文章もあるが、直接的な表現をとっていない文章もかなりある。あの日と、あの日以後を生きる私たちは、とても一通りでは表せない状態に居るのだ。

『Marchは、Yarnによって作られている』この英文の表題を考えると、糸を紡ぎ、それを織り、物語っていくことによってあの年の三月をなんとかして表現しようとする作家としての後ろめたさや希望を感じる。過ぎてゆく日常と自然災害や原発事故を対比させ、とにかく乗り越えなければならないものの正体を見極めようとしている。

「あの日の記憶が風化することを最も恐れる」と事件や事故にあった人は言われる。日常が飲み込もうとすることに対して、楯突き、多様に抗う作家たちをこの本の中に見た。

〈言葉は壊れなかった／流されなかった〉(谷川俊太郎 「言葉」)に始まって、読み終わるとこの冒頭の詩に戻ってくる。

「それでも三月は、また」この題名は、これに続く言葉を待っている。私たちそれぞれは、どんな続きの言葉を持っているだろうか。書いてみることにして読書会を閉じた。

講師 吉川 五百枝

◆ 「それでも三月は、また…」

それでも三月は、また“いわばしる垂水の上の早蕨の萌え出る春になりにはけるかも”と春への賛歌を詠む人を待っているだろう。何が起きようと、萌え出るいのちは、光に向かって伸びて行く。それを来る年も来る年も繰り返して来たのだから。(K)

「それでも三月は、また…」のつづき

5年前に3月11日を経験しました。私の感覚の中では少し、いやもっと薄らいでいます。毎年毎年3月はやって来ます。3月の度に福島が蘇ります。でもいつの日にか3月が来ても、思い出すことさえなくなるのかも知れません。それが怖い様でもありこの事にふれない日々が来る？今後の自分がためされる様です。(K)

「それでも三月は、また…」やってくる

地震国日本、また原子力災害が起こり放射能汚染が起こる可能性だってあるかもしれない。今回、多くの犠牲によって、私達は沢山の知恵を得た。その知恵を無駄にしてはならないと思う。今の時代を生きる——私達にその責任はある。

今の日本を作ったのは 自分でもあり

また 未来を作るのも 自分である

生きることが如何に素晴らしいことかをわかり、伝えていくためにも。(Y)

「それでも三月は、また…」…やって来る。

明日と言う、未来がやって来る

表は未来で希望

裏は、惨事はこれからもやって来る

貴方なら、明日に向かってどう暮すの？

立花隆の本の中に

進化とは、習い覚えた生活パターンより、新しい環境に身を置き。適応・努力をし続けるうち、心身両面で、新しい能力が開発。新しい生物種。DNAが変わってくる。これが歴史が続き、生き残る事ができた種。地球は大きい。生物は小さい。新しい生物種に1代ではなれないからやっぱり、分かった上で楽に生きる道を考えます。(M)

「それでも三月は、また…」“春”を連れてくる。

未来を信じれそうな“春の陽射し”を、

人の温かさを感じられる“春の匂い”を、

新しい一步を踏み出す勇気の“春の風”を連れてくる。

さあ、生きてみませんか。

貴方のそばにいる人と一緒に。(S子)

「それでも三月は、また…」くりかえす。

地球は生きてます。

不幸な事が日本は複数のプレートに接した場所にあります。

数千万年後か一億年後かにはハワイが日本海近海に来、その残骸が日本列島の下に入り、又同じ事が起きるでしょう。(TS)

「それでも三月は、また…」めぐってくる。

春になれば、梅や桜の花もさく。

夏になれば海水浴、

秋にはピクニック……

2011年3月11日から5年あまり。不安を感じながらも記憶が少しずつうすらいでいると思う。

原子爆弾投下を受けた広島こそ、原子力のおそろしさを一番よく知っているのではないだ

ろうか。

原子力発電を使用しない方法はないのだろうか。

芸予地震がいつ来てもおかしくないと言っている人もいる。

こわい！！（K T）

「それでも三月は、また...」。

ふと夜中、寝る前にテレビをつけた。

今日も1日が終わる。

テレビには動物園に中国からパンダが来て、トラックが映っていた。

平和だなあ。いいニュースが流れている。

こんなニュースが毎日たくさんあったらいいのに。

でも、その後しばらくして、東北大震災のあの津波の映像をびっくりして観させられている。こんな日が来るとは思っていなかった。

日本中がひっくり返っている。

あのほのぼののニュースにひたれる日があった日に戻りたい。震災にあった人も、家族といっしょに観ていた人々がいたはず。

あの日に戻りたい。

かなわないから、あの日のような日々をまたすごせるよう、日々をつくっていこう。（T K）

足元が、崩れた。

今までのすべてが終わったのだと感じた。

あの、黒い映像をTVの向こうに見たときに。

今までの日常が、潮のように引いていった。

昨日と今日の大きな裂け目を、あの日、覗いてしまったのだ。

あの底のない暗闇を。

でも、それでも。

バラバラになった足元を、時間が一つずつ繋げていってくれた。

寄せ集め、くっつけ、固め、またひとつの私の土台になっていった。

そして時間は、私の体からあの衝撃を薄めていく。

そして日常は、あの地震前に戻ったようなふりをしている。

その切ない擬態に、騙されたい私がいる。

それでも、

それでも三月は、また

足元を見てしまうのだ。

コンクリートのように、しっかりと結びついているような、私の足元。

一度壊れた土台は、また少しの震動で再び割れるだろう。

あの底のない暗闇を、再び感じるだろう。

外出先で、地震が起こって帰れなくなるという不安。

都心を歩くときは高層ビルの輝くガラス窓から、離れようとする。

エレベーターは極力乗らない。

鞆にはいつも懐中電灯と薬が入っている。

決して、前と同じではない。それを知っている私がいる。

あの三月を越えてきた者は、

今日と同じ明日が来ることを、以前ほど信じてはいないだろう。

私たちはわかっている。またいつか、あの日がやってくる。

その日に向かって生きているのだ。薄氷の上を渡るように。

明日はどうなるかわからない。

あの日以来、あまりにも不確かな、明日。

でも、

それでも、私は。

明日を思って、今日を生きたい。

確信のない、明日を生きる勇気をもって、今日を生きたい。

それなしでは、生き抜く力を生み出せないから。

喜びを見いだせないから。

明日を思って、生きるしかない。

たとえ望むような明日が来なかったとしても。

でも、

だからこそ、私は。

そんな今日が、とても愛しい。とても愛しい。
そっと抱きしめながら、ひとつひとつ、積み重ねていく。
そうして、人生が閉じることを願う。
心から、願う。

(C)

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 震災で亡くなられた方、残された人々に関する小説エッセイ。幸せや希望をどうもつか考えさせられる。悲しみをいつも思い出して戻ってしまう私より、当時の人々の方がはるかに深刻だ。もし、良い面をみるとしたら、新しい生き方が生まれると。(TK)
- ❖ 17名の作家が3月11日の事について書いています。その中で10人の作家がこの本の為に書き下ろしています。それぞれ3月11日について深く、浅く(?)考えさせられます。私は5年経過した今、あらためて考えさせられました。(K)
- ❖ 惨事は、これからもやってくる。あなた方にも心の準備がありますか?心にひっかけて置いて下さいと言われた様な気がしました。(M)
- ❖ 3. 11について17人の作家によってつむがれた1冊であった。いろいろな角度から書かれていて考えさせられる時を与えられた。心に残る言葉も多々あった。「幸福は得ることではないと同様、不幸は失うことではない」(Y)
- ❖ 東日本大震災のアンソロジー。特に谷川俊太郎の詩『言葉』が心を打つ。天災(大地震と大津波)の地獄絵図の中で“命”は茫然となり絶望を感じ言葉を失う。しかし“残された命”は生きるために、悲しみを乗り越えるために前を向く、言葉で(被災地の子供たちの作文集『つなみ』等)“日本中の残された命”は家族で口伝とし、地域で記念碑・郷土史記録、全国で関連絵本、関連書籍、TVドキュメント、写真集等という言葉で語り継ぐ。しかし復興は道半ば。“平成の濱口梧陵”を探してしまう。
- ❖ 人災、福島第一原子力発電所の事故は憤りを残す。命の危険を脅かし、思い出は入れない故郷にずうっと置いてけぼり。日本の科学や政治・産業はチェルノブイリの事故に何を学んできたのか。過去の出来事ではなく、未来へと言葉でつなげる“日本のスペトラーナ・アレクシエービッチ”の登場を希求して止まない。(S子)
- ❖ 先生の話聞いて、谷川俊太郎さんの詩「言葉」の深い意味が少しわかったような気がした。東日本大震災に関するものなので、全編重苦しい気持ちで読んだ。中では「ルル」が印象に残った。(KT)

『それでも三月は、また』を読んで

谷川俊太郎の“言葉”詩 何もかも失って言葉までも失ったが言葉は壊れなかった 流されなかった ひとりひとりの心の底で。自分自身に体の中身は奪われない。如何なる災難に遭おうとも他の人・物には与えない。強い信念を持って難局に立ち向かう強い心を持つ、普段から心して生活したいものです。 (M子)

◆ 11月課題本 ◆
『村上海賊の娘』
和田 竜／著 新潮社

読書会の楽しみは、そこで何が話されるかということではあるけれど、竹原書院図書館の読書会では、司書さんがどんな参考図書を探して見せてくださるかという楽しみもある。今回は、瀬戸内の村上水軍の歴史を基盤として創作されたものだから、竹原市の郷土資料も出してもらえるのではないかという期待があった。

歴史上の村上水軍については、すべてが詳らかになっているわけではなく、資料の記述にも、よく解らないと書かれていることも多い。とりわけ、当時の織田信長と毛利家の力関係や、そこに絡まる本願寺勢力の望みなど、村上水軍をとりまく状況は広い視野を要する。また、作品に出てくる船の形や様子についても、「大安宅」「関船」「小早」などは言葉だけでは想像するのが難しい。やはり、参考図書が大いに役に立った。

「村上水軍」ではなく「村上海賊」となっていることから話を始めた。

歴史上は「村上水軍」の呼称が優勢だが、この小説は創作であり、解っている史実には忠実ながら、そもそも主人公の「景姫」も、文献の一部に出てくる人物を借りているくらいだから、「村上水軍」の研究書ではない。主家を持つ「水軍」の呼称より、「海賊」とした方が人物を自由に動かすことができるという作者の意図を想像する。

1588年、豊臣秀吉が「海賊禁止令」を制定したところから見ても、水軍は時の権力者には邪魔になるような海賊的勢力だったに違いない。海の刀狩りとも言われるようだが、それ以降、村上水軍は表舞台から消えていく。

それにしても、陸でも海でも合戦の場面の連続である。上下2冊の分厚なものを、ほとんど刀や槍や鉾での殺し合い、大小鉄砲の撃ち合い、船の火攻め、ぶつけ合いなどの修羅場の描写で占めている。この合戦模様には、ほとんどの参加者が閉口したようだ。その間をかいぐって村上武吉、乃美宗勝、児玉就英、鈴木孫市など歴史上実在した人物の名を持つ登場者が物語を展開する。

主人公と目される「景姫」は、史実に縛られない。現代娘が、戦国時代を背景に借りているだけだとも思える。最後まで景姫の相手役をつとめる真鍋三五七兵衛も、怪力無双の武芸達人だが、現代的に映像化するのに不足はない。

だが、どうしてこれほどまで戦うのだろうか。

武士が「自家の存続」を大切に思い、それを守るために戦っていることはしっかりと書き込まれている。それと同時に、この小説では、一向宗（浄土真宗）の門徒衆が信長勢力と戦う。

小説に書かれている時代は、浄土真宗の開祖である親鸞聖人の法弟の明光上人が福山市沼隈町に草庵を結び、一向宗（今で言う浄土真宗）を布教してから350年余り経過している。この350年の間に、浄土真宗は人々の間に新しい生命観（消滅するのではなく往生する生命観）や世界観（仏国土、浄土という世界観）を伝えていた。これまで聞いたことのないその教えに帰依した門徒衆が増えていった。

一向宗の理念と対立して支配しようとする信長軍に、門徒衆は一向一揆をもって抵抗し、その最後の拠点が大阪石山本願寺であった。そこへ、村上水軍の助勢を頼りに、支援の兵糧を送り届けようとして戦ったのが西国の門徒衆であった。この戦いに命がけであったのは、〈弥陀のご恩に報いるため〉であったと文中で明かしている。

法主の側近が「進者往生極楽 退者無間地獄」と、門徒衆に戦いを鼓舞したと小説には書いてあるが、この言葉を書いた手織りの木綿布は、今も竹原市内のお寺に残っている。石山の戦いに出陣する兵糧船に掲げられていたものと伝わる。しかし、この言葉は、親鸞聖人の教えには反するだろう。親鸞聖人は、このようなことでお浄土への往生を語られたことはないはずだ。作者は〈脅かしだ〉と書いている。親鸞聖人も、明光上人も、このような旗幟の文字を見られたらどんなに悲しまれることか。

そのような脅かしに乗って門徒衆の代表とも言える留吉や源爺は動いたわけではない。作者は、「往生」について〈この爺が極楽往生したという証を見せよ〉と景姫に詰め寄らせる一方で、〈地獄行きだといわれようが何だろうが、わしだけは、阿弥陀様のご恩に報いるためにここにおり続けるんじゃ〉と留吉に叫び返させる。

〈往生は玄妙極まるものなのである〉という言い方をして、作者は往生についての論議は進行させていない。「阿弥陀様の御恩とは何か」という教義についての問答は、この場合、小説としては省くのが得策だろう。しかし、それ故に、なぜ戦うのが疑問のまま戦闘場面だけが続く結果になっている。

石山本願寺の戦いは、信長が死を迎える2年前に和議が成立して終わった。

景姫という自由にもものの言える女人を戦いの渦の中心に据えて、海賊という〈乱世のあだ花〉ながら、思うさまに生きて来たという姿を作者は描いたのだろう。〈この女も、思うさまに生きたと思いたい。〉という結びの文の〈思いたい。〉という最後の一語が、参加者の共感呼んだ。

これだけの命を戦いの中でなくしたのだ。矢や鉄砲に命を落とした殆どの方は、思うさまに生きたと言えないのではなかろうか。せめて、景姫には、思うさま生きたと言わせたいのだ。命のやりとりを描いた作者のやるせなさが〈思いたい〉という結びの一語に込められたのではないかと受け取った。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 戦国時代の歴史、地元の歴史がよくわかりました。
戦争と権力、自分の家の存続中心の考え方は今も昔も変わらないと感じました。(TK)
- ❖ とに角面白い小説でした。下巻の合戦の描写のリアリティーは時間を忘れてどんどん読み進めました。一読をお勧めします。(N2)
- ❖ この物語はさすが本屋大賞をとっただけあって、大変おもしろく一気に読める。どの登場人物もみな魅力的な個性の持ち主。特に七五三兵衛は、とにかく自信があり、強気、どんな苦境にあっても最後まであきらめることを知らない。常に前向きで明るい。こんな人が上司ならついていく者もやる気倍増しそうである。最後までワクワクヒヤヒヤ読める本であった。(Y)
- ❖ 上巻・下巻と2冊の分厚い課題本でしたが、案外楽に読むことができました。映像にすることが決定しているとか…。自由に生きる人間として「景」が存在したのだろう。また歴史を彩った人達の影には多くの庶民がいたに違いない。(E子)
- ❖ 戦乱の中では、宗教も軍力もリーダーは勝ちたい一心から人の心も武器として使う。しかし個の人格は苦しみの中から、不屈の性根で自意識を思うさまに生きたように思う。(M)
- ❖ いつの世も、人にはその人の「生きる流儀」がある。それは一人一人尊ばれる。心地よくそう想った『村上海賊の娘』であった。
戦国の世、男は大義を重んじ、家の存続のために策略し戦をする。当然のことであり理の行動である。一方、主人公：景は安芸門徒の一途な生き様に心動かされ、行動を興す。自分や家のためでなく、損得も考えていない。そればかりか命をも投げ出し、安芸門徒を救わんとする。その姿に周りの男達も心動かされ、大事を成就するに至った。情の行動であり、読者を虜にする。人は日常は理で行動するが、琴線に触れると情で行動する。そのバランスが性格を意識付け、その積み重ねが生きる流儀を形づくるのではないだろうか。村上水軍は海賊にあらず、「海の戦国大名」である。村上水軍博物館に行き、能島クルージングをしたくてたまらない。(S)
- ❖ 長くかかってやっと読んだ。
残酷な場面が多いのには閉口したが、竹原、瀬戸内海が出てくるので興味深かった。竹原には村上元吉の墓もある。子供の頃から浄土真宗に御縁の深いところで育ったので、中国地方ではじめての真宗のお寺、光照寺見学のチャンスは一番の収穫だった。(KT)

『村上海賊の娘』を読んで

戦いと執念の物語である。なかなか感情移入できず、あまりにも戦いの場面が多く、途中で内心、辟易した。しかし読み進むと、なぜそこまで戦うのかと不思議な気持ちにさせられ、その答えを知りたいと思って、つい読み進んでしまう。著者はどうしてこうもしつこく、しつこく戦いの場面を連ねるのか。

『自家の存続』。すべてはここにある。その執念が持つ力の恐ろしさ。あでやかさ。逆に執念がなければ、力が出ない、ともいえそうだ。

この物語はやはり村上海賊の娘、景よりも、眞鍋七五三兵衛が主人公のような気がする。荒々しく残酷な海賊の話っぽいタイトルでは読もうとは思わないが、その荒々しい世界の女の物語という、ちょっと興味がわき、つい手に取りたくなる。そこを狙ったのでは思ってしまう。七五三兵衛のことを知るために、戦いの意味が何もわかっていない景がいる。景と私は同じ疑問をもって、物語を進んでいる。

「俳味」という言葉もおもしろかった。その人がその人らしい行為を認めること。七五三兵衛の鈍感ではない、おおらかさも好ましい。

「でも絶対叶わない望みだってあるぞ。どうするんだ」という景の疑問に七五三兵衛は一笑に付して答える。「叶わんまま死ぬだけじゃ。せやけど踏ん張った自分（わが）ちゅうもんだけが残る。へこたれたらあかん」。七五三兵衛であっても、戦いの相手は自分なのだ。

遠くなった瀬戸内海の風を、光を、ふと感じさせる物語だった。(C)

上巻474頁、下巻499頁、頁数も迫力ありますが、内容も負けていませんよ！上巻P144の4行目に出てくる光照寺は、ナント、なんと、私たちが読書の指導を受けている吉川五百枝先生の生家。すごくありません！ 先日（11月9日）フィールドワークとして、沼隈にあるこの寺に行って来ました。大きさが桁違い。大屋根の美しさは絶品。（本の内容にはあまり関係ありませんでしたネ）

「おまけ」にもう一つ。竹原の長善寺に現在も保存されているのが12文字の文言を記した軍旗。

進者往生極楽

退者無間地獄

信者はこの旗のため生死をかけたのです。

余談が多くなりましたが、海で生きる者の叡智が満載されています。主人公の景という女性も面白く魅力があります。

本の厚さに負けないで完読すること、お奨めします。(K)

当本は織田信長が石山本願寺を兵糧攻めにしたり、11世顕如が将軍（韃に在）毛利氏に援助を求める為に小早川隆景の将浦宗勝が司令官となって小早川水軍、毛利水軍、島衆、門徒家と村上三島が加わり兵糧を送った史実に基づいての物語ですが、この時の村上家の総領は能島村上武吉ですが、これには元家、景親の男子の名はありますが、女子の名はありません。

女子も存在していたでしょうが、それに登場するような女子は有力な村上氏の娘でなければならない。しかしながら来島村上氏通総は出陣しておらず、重臣の村上吉継の名があります。因島村上氏にも女子の名は見えません。この本の文章から推察すると関船に乗船したようで、燧灘から塩飽諸島の敵方の船に遭遇したようですが、当時の塩飽は能島村上武吉の領分です。織田信長が塩飽衆に許可状を出したのは元正5年3月26日で天正4年7月の石川合戦と矛盾する。大船団で行動している時、先陣を切って行動するのは航海術戦術に秀でたものが当たるのが当然の事で、一流の海賊衆しか思い浮かべません。女子が軍事軍略に通じ、かつ瀬戸内海を知りつくし、十分な航海術を身に付けていたとは思われません。ましてや毛利氏側から15名ほどの武将も出陣しています。軍艦として各要所には配置されていたはずで。

これらの事から、木津川の戦いの史実を元にしたフィクションと考えます。活躍する女性像を描けようという意図が見え見え。

登場人物の立ち振る舞い、言動がくだ過ぎる、飢餓状態にある本願寺衆をなんとしてでも救おうとする門徒宗の姿（自分達が食べるコメを少しでも差し出していた人々）が欠落している。両社の生々しい戦闘場面を描くことで読者を引きつけようとする安易な表現、構成となっている。戦闘ですから見るに耐えない描写をするのにしのびない場面が実際にはありますが、その時代の信長、秀吉、人を助ける為に身を切ってまで一般人が参加しておるわけですから、そのあたりの決意、思いが欠落していたように思われます。題名からしてエンターテインメント的深みの無い駄作。売らんが為の本としか思えません。司馬遼太郎、山岡荘八に訊きたい。（長年船を動かすということを生業として来た私としてはもっと海のことを勉強して書けよと言いたい）（S）

◆ 12月課題本 ◆
『梟の城』
司馬遼太郎／著 新潮社

先月の『村上海賊の娘』も上巻下巻とあって長編だった。今回の『梟の城』も「長いなあ」と思うものの、分量と中身のバランスはとれていたというのが例会冒頭の多くの意見だった。1冊で652ページを読み終わるのには、かなりの我慢が要ったようだが、後半になると取り込まれてしまったという意見が代表していた。

司馬遼太郎という作者名がひっばっているのは感じられたが、忍者とは何者かを描きたかったわけではなく、人間を描きたかったのだろうという感想で、全体の意見が一致した。

もともと忍者であるからには、後世まで功績が伝えられるようでは失格であろうから、何をしたかという伝記にはなり得ない。とすると、忍びの者という職業を持つ人の人生模様と言える。

主として活躍するのは、豊臣秀吉の首級をねらう伊賀者の葛籠重蔵と、伊賀者だが京都奉行前田玄以に仕えて伊賀からはみ出した風間五平。その二人に、伊賀での師匠の娘である木さる、甲賀で育ち今井宗久の養女となって石田三成の“乱波”をつとめる小萩がからむ。しかしこの4人の男女の絡みは、さほど目新しい書き方というわけではなく、くノ一と言われる女忍者が珍しいというくらいのことではなかったか。それより、五平や重蔵について書くときは、墨をたっぷり含ませて思いのまま筆を運び続けた豊かな運筆を感じる。

伊賀者である葛籠重蔵の人物について

〈不思議な虚無主義をそなえていた。滅亡のはかなさをその目で見続けてきたからであろう。〉

〈ほまれを持たぬのが、伊賀者のほまれ。独立不羈〉

〈報酬をくれる者ならいかなる者の側にもつき、仕事が終わると、その敵側にさえついた。〉

〈人間を草木のようにしか見ていない。この非情さこそ、伊賀者の至純な魂〉

〈人間の苦痛の機能から超絶する能力をもつという自負〉

〈槍で脾腹を串刺しされ、刀で手足を刻まれても、吐く氣息の音もたてぬのが伊賀の習い〉

〈修練の目標は、己の心を己が自在に支配すること〉

〈忍者としての生涯の美しさに憑かれている〉

これらが、重蔵の生き方として描かれる。まるで修験道の修行者のようだ。

目標を設定し、そこに向かって自己抑制の修練を積んでいく重蔵は、禅門にある雲水毒潭に

〈求道の目指すところは生身からの超脱であり、忍びの所行はいかにも解脱に似ているが般若が伴わぬ〉と言わしめる。

〈般若〉は、仏法上の智慧を意味する。この智慧は 自己抑制を成就するための智慧ではなく、自己から自由になる智慧のことだと思う。いつか崩れざるを得ない生身の自己であることに覚醒することをいう。

重蔵の最大の覚醒は、秀吉の寝所に見事忍び込み、いよいよ首をはねることが可能になったときだ。人間がいかなる者か、権力も財力も天下第一の秀吉であっても、重蔵がのぞき込んだ老い病むその相貌は、人間の自己抑制に限界があることを語ったに違いない。必ず崩れる自己だと聞いた。

小萩が傍らに居る穏やかなくらしが描かれるが、重蔵は、忍者として人生を生き納めたのではなく、自己から自由になりつつ最終ページを迎えている。

〈山容の中の地物の一つに化しはじめていた。〉

忍者ものの小説に違いはないが、この最終部分。うーん！と唸らざるを得なかった。かつては、自己抑制し、地物に化そうとすることが忍者としての技量であったが、いまや重蔵は、そのまま自然の中にあって自己からほどかれようとしている。肯定も否定も超えて。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 軽妙なエロチシズムを少し交えながら、史実に残る人物を登場させ、金銭にさとい人物、利害のみを追求する人物を描きながらも品のある古風な言い回し、個々の場面を軽妙かつ奥深い表現をする作家で、堅い信念で行動する忍者の生涯を描く。(S)
- ❖ 面白いの一語につきます。一気に読みたいと思いますよ。でも長編です。それに漢字・語句の難しいことこの上ナシ。辞書を引きながら読んでいますとなかなか前のめりにはなりません。すぐやめました。大体前後の感覚でいけました。流石！直木賞、司馬遼太郎の面目躍如 先月は海賊の話、今月は忍者の話 なかなかのものです。
二人の男の生き様の違い 忍者とはかくあるべきものと言う一人の男 いやいや忍者を捨てて生き様とする者。伊賀と甲賀忍法の違いチャンバラ好きにとってはたまりません。二人の女性も登場 主要人物四人のそれぞれの生きる美学が込められていると思いました。(K)
- ❖ 忍者っているの？と思っていた私。先回の村上海賊の本を読んで歴史もさらに深くなりました。奈良とか山や野・風の風景をイメージして美しさと素朴さを感じました。(TK)

- ❖ 時代の流れに翻弄されながら、その時代に暗躍した伊賀者・重蔵と五平を中心に、生き方に袂をわかった二人がそれぞれの人生を歩む。身内を殺され重蔵が仇敵を信長の死から、秀吉へと据える。ついに秀吉を発見。秀吉を前にして重蔵は斬り捨てなかった。何故？秀吉が腑抜けの老人にしか見えなかったからか。彼を葬る為に凄惨な修羅場を命を賭してぐり抜けてきたのに何故？里の平穏な生活に戻った重蔵の本心をのぞいてみたい。(YA)
- ❖ 司馬さんの広い心の領域に何も考えず、入りさせて頂きました。人生とは、考え方も習慣も自分が作り、自分で足を引張って生きるって。分かってたらしもう少しく生きれたかも。広い心を、考え方を有難うございました。(先生、皆様、司馬さん)(M)
- ❖ 夜間、音もなく忍び獲物を捕食する「梟」は、まさしく忍者と同類です。いや忍者が梟かも。五平と重蔵の忍者としての生き方、忍者の美に徹する者 忍者という過去を隠して、何とか生きようとする者、それぞれの生き方、終わり方が気になりました。(N2)
- ❖ 結末が意外な展開だったが、セルフコントロールするのが忍者。それを愛することではずれてしまった重蔵。という先生のお話に納得。「セルフコントロールをはずれてしまうのが人間」という言葉に自分を振り返っても妙に胸に落ちた。(Y)
- ❖ 今月の課題本を手にとった時「わぁ～重い！」と感じました。分厚さと中身の両面から感じ「読みこなせるかな」って不安になりましたが、一日〇〇ページは読もうと決めノルマを課して読んでいきました。しかし、少しずつ読むとイメージがつかめず前ページを読み直すことがしばしばでした。これでは(この読み方では)楽しくないと思い、一日の読む量を増やしてみました。するとどんどん内容に引き込まれ最後は2日間没頭して読むことが出来、読後「わぁ～！こんな結末だったんだぁ～ “愛”、なのか “人間味”、なのかわからないけど重蔵カッコいい！」って思いすっきりした思いになりました。(R)
- ❖ 「忍者の名前やその人となりがはっきりすれば、すでに忍者ではなくなる」会で話されたことである。忍びである重蔵は、「愛」により、人間性を覚醒する。最後のページに次の表現がある「重蔵は、山容の中の地物の一つに化しはじめていた。」忍びの者をあたたかく見る司馬遼太郎を暖かく思う。(E子)

『梟の城』を読んで

この作品は昭和34年下半期の直木賞をもらい、流行作家となった。私は高校卒業した年です。この頃は外国のミステリー本ばかり読んでいました。新潮文庫40年発行から平成11年まで89刷もなされているのです。

戦国時代末期、伊賀忍者葛籠重蔵・風間五平・黒阿弥・くの一木さる・小萩・権力争いを背景に、伊賀者の生きざまを通して、忍者の実像を書いた歴史小説。

血腥い内容なので読んでいるうちにしんどくなりなかなかページが進みませんでした、最後は、平凡な山里の暮らしをしている重蔵と小萩にホッとした気持ちでした。

忍者は人間としての心をすてないと生きてはいけない世界で生きていて、自然の中で人の心を取り戻して人間の世界に帰って夫婦として暮らして行くことでしょう。しんどかった。
(M子)

司馬遼太郎氏の最初の長編小説、直木賞受賞作である。武士のような忠義などはなく、おのれの職能のみに生きる集団、乱波（忍者）の物語。司馬氏はその後も多くの歴史小説を書いているが、最初のものが、光の当たっていない者達が主人公であることが、なんだか嬉しく感じてしまう。

豊臣秀吉暗殺ということに生き甲斐を求める、伊賀忍者、葛籠重蔵。忍者としての生き方を捨て、武家社会で出世したい伊賀忍者、風間五平。そこに様々な人々の思惑、思いが絡み合って、物語は進んでいく。多くの仲間を失いながらも、とうとう秀吉の寝所へ忍び込んだ重蔵は……。このクライマックス、とても重蔵らしい決着のつけ方だと思う。

女への思いに揺れ、元仲間への思いに揺れ……。心の揺れ動く様が丁寧に書かれている。戦いのシーンも結構あるのだが、それよりも登場人物達の、自らの心の動きを冷静に客観的に見つめて考えている様子に心ひかれる。彼らの精神は見方によっては残酷であり、合理的であり、清潔でさえあるともいえる。しかしおのれの為だけに生きる姿は、痛々しく、人としての喜びがない。壮絶な孤独の中にいる。厳しい生き方で、修行僧のようだ。忍者として育ち、成長した彼らにとって、忍者としての生き方をやめるということは一度死ぬということになるのだろう。今までの生き方を捨てること。捨てても、別の生き方で生きていけるかどうか、その保証はない。忍者の生き方を捨てた、捨てようとしてもがいた、風間五平はなかなか勇気ある生き方ともいえる。今なら、“リセットをかける”とでもいうが、生き方はそう簡単にはリセットできないのだ。

忍者として生き、死ぬことに人生を見出した重蔵に、心寄せる甲賀のくノ一、小萩。その小萩に同じく心ひかれ、揺れる重蔵。印象的なシーンがある。重蔵と小萩が一晩共に過ごした翌朝、小萩が朝餉の準備をしている。その物音と気配に、小萩と別れると決めた心が、忍者として生きる気持ちが、折れそうになるのである。「この朝ほどの危機を、かつて覚えたことがなかったように重蔵は思った」。厳しい戦いをかいくぐってきた強い忍者である重蔵でも、やられてしまうほどの力が、何気ない生活の中にあるのだなあとおもしろく思った。だから、女は強いのだなあ。小萩から、重蔵を説得してくれと頼まれ、説得できなかった雲水の毒潭は人生を風に例えながら言う。「おのれの樹てた生き方が、当人にとって美しければそれでよい。それぞれのいのちを、思うさまに生きていってよいことじゃ。それもこれも、やがては微塵と吹き散る」。それに対して小萩は、毒潭のことを気が弱いといい、「おな

この智慧とまことで、重蔵さまの生き方をお変えして見せます」と言い切る。ああやっぱり、女は逞しい。

司馬氏の、人間を見つめる目。情熱と、冷静さとのコントロールに四苦八苦する忍者達の姿を見つめ続ける、遠くて、冷ややかで、でも温かいまなざし。悪人でも、善人でも、浅はかで愚かでも、純粹で自分勝手でも、同じように受け入れ、愛しむ、そのまなざしが見える気がする。生き方にもがく人のことを、やっかいだと思いながら、たぶん、それでも愛さずにはいられないのだろうな、と思う。(C)

先ず長編なので読みごたえがあった。又知らない漢字や難しい言葉が沢山あった。

戦国時代が終わりを迎えようとしている頃、暗躍した伊賀者 葛籠重蔵と風間五平の二人を中心に展開する物語である。やがて二人は生き方に袂を分かつ。

織田方に伊賀は掃討され、信長の死後その仇敵を秀吉に向ける重蔵と、その重蔵を捕えて功を上げようとする五平。一日一日を命を張って送る中、師匠次郎左衛門や、忠実な黒阿弥も非業の死をとげ、また逆に敵対した洞元を斬り捨てる。苦闘の末、伏見城で秀吉を見つけるが寝床の秀吉が唯の弱々しい老人と見るや斬り捨てる気持ちが萎える。皮肉にも重蔵を追ってきた五平がそこで秀吉の兵に殺される。

執念をもって秀吉を追ってきた重蔵と寝床の秀吉との会話が何とも表にして滑稽ささえ感じとれる。

かつてスパイで重蔵を慕っていた小萩と里に戻り、安穏な日々を送る。里の穏やかな自然や風景が今までの重蔵を消し去ってくれているとやさしく思う小萩だが。

一体伊賀者とは何だろう。(YA)

「ううむ」と唸りました。ただこの想いをどのように言葉で表わせばいいか判らなくて困り果てました。

もう一つは疑問です。終末は何故あの結末にしたのか。

そこで和田竜の『忍びの国』を比べ読みしました。

次に20年前司馬遼太郎が亡くなったときの『文芸春秋の臨時増刊号』で彼の言葉を見出そうとしました。

戦国の権力争いを背景に、その影で死闘を繰り返す二人の伊賀忍者のすさまじい生きざまを、奥深い人間に光を当てるという視点で切り込み、みずみずしい情感と卓越した文章力で、心の深層まで語り尽くし、華麗奔放に空想していることに、私自身は感嘆しているのではないかと感じています。

疑問については、臨んだ「読書会」で、溜飲がさがりました。忍者はセルフコントロールの極致です。しかしそれを壊すのは「人を愛すること」。重蔵は葛藤しながら尚揺れる自分

の心に気付き、コントロールの手を離し、小萩を愛します。それも受け入れていく「諸行無常」。司馬遼太郎が考える望ましい人間のあり方は自然の姿。「ううむ。なるほど」また唸りました。もう一度読み直してみます。(S子)

戦国時代の影の立役者といえる忍者を主人公に、それぞれの生き様と人間模様を描いた小説です。

伊賀忍者下柘植次郎左衛門を師匠として修業した、葛籠重蔵と風間五平。それを取り巻く人々。師の娘木さる、重蔵を慕う甲賀忍者の小萩とその育ての親豪商今井宗久。

父母と妹を信長によって惨殺された重蔵は伊賀者として地上の何物にも己の精神を売らぬという倨傲な精神に生き、秀吉を斬ることにより伊賀の復興に捨身するという美学を固辞している。一方五平は早々と忍者の世に見切りをつけて伊賀者であることを隠し、重蔵を差し出すことによっても出世の糸口を掴み、わが身の活計を確かなものにして生き延びようとする。許嫁の木さるの心と体を弄んでも自身の心には何の通痒も感じず人としての感情をすべて殺す忍者の性が身についてしまっている。重蔵は己の美学に従って行動し、忍者としてその精神の中に神も仏も住ましめなかったのだが、小萩を恋することによって、心が揺れ動き己の生き様に疑問を持ち始める。後半暗殺を企てた重蔵が生き延び世間と離れて山里で妻となった小萩と暮らしたが、世間の裏でしか適用しない忍者の境遇から何とか抜け出そうともがいた末に命をおとした五平には哀れを感じる。(N2)

◆ 1 月課題本 ◆

『穴』

小山田 浩子／著 新潮社

「表題作の『穴』よりも後ろに収録された作品の方がよくわかっておもしろかった」という意見があちこちにあるようで、この例会でも、やはり聞こえてきた感想だった。

「よくわかっておもしろい」というのは、文字文化の評価としての一つの視点だとは思う。ただ、それがすべてではないだろうという疑念も起きてくる。

さて、この『穴』を楽しむための他の視点はないかと探してみるのも読書のおもしろみだ。

「文学は、具体である」。

どこかでいつか読んで以来、まさにそうだと思ってこの文を使うことも多かった。しかし、具体とは何だったのだろうと、この『穴』を読んであらためて考えることになった。

描かれる人物や生き物がリアルであればあるほど、我が目や想像への信頼が深まっていく。『穴』の庭の草木や川岸の描写が真実味を持って何行も続くと「ああ、嵌められていく」と感じてしまう。引っ越しも、田舎の暮らしぶりも、リアルな名前や姿で、知っていることがこの上なく安心なのだ。雨の中でも合羽を着て水をまく義祖父が登場すると、この老人は惚けているのかななどと診断するし、義兄はひきこもりなのだろうと判断して安心する。

安心が続くと、川原の穴、義兄、黒い動物がそれらしく確固たる位置を保つことになる。義兄は、お隣さんが口を滑らした夫の兄に違いない。黒い動物は何なのか。主人公の〈あさひ〉がインターネットで調べたのと同じことをしたつもりになって知ろうとしている。さらに、穴に落ちた時の感触。子どもたちとムカデの入ったペットボトルを介して群れる時間。いずれも形があって無理なくついていける。これも「具体」的に「わかる」。しかも、「具体」の一部でしかないのに、そのすべてが解ったと思ひ込ませる。

だから、「穴」も「義兄」も「子どもたちと遊んだ時間」も、どうもアヤシイと読み進んだところで、なんだか不思議な話という結論を導く。

もともと、「具体」的にリアルに記してはいるが、それが実在するという保証をしているわけでないし、その必要も無い。そこが、小説を書く人の使う技術なのではないか。読み手が勝手に「具体」の記述にしばられて実在と思ひ込む。

文学は、「具体」の記述はするが、虚構なのだ。虚構だが、虚構内部で矛盾してはいない。虚構の中のリアルさが生命線だ。

「文学は具体である。」まさにそうだが、その具体がクセモノで、そうだ、そうだ、その通りだと思っている間に、さっさと置いてきぼりにして進んでいくのだ。

「本当かと思っていたのに、違うみたい」という感想も出てくる。

芥川賞にどれほどのねうちがあるのかわからないが、『穴』には、本当か嘘か、何を象徴しているのかなどと、読者を引き回すその上手さがあると思う。そういう技法で作者は何を表現したかったのだろうか。

何の変哲もない日常を描いて、まるで“だるい”小説のような顔をして始めておいて、その実、フム？となる。

私たちの実人生も、もしかしたら、こんな風に日常と非日常が紙の裏表に描かれたようにつながっているのかもしれない。表側では、いつも携帯を見ている夫と妻のように波風立たず過ごしていても、裏側には、別の物語が書かれているのかもしれないのだ。〈嫁さん〉という「家」との関係性を示す無個性な名がしばしば出てくるのも日常描写だろう。〈あさひ〉という名が、その裏には常に書かれていて、携帯から目を放さない夫の宗明を見ているはずだ。

当然、表裏は実人生として一つの物語だが、流れて止まらない時間の上では同時に読むことができない。しかも何枚も重ねられている。その裏表に書かれた人生を、一つのものとして読ませるのが文学の技法ではないかと思う。

実人生は、さまざまな裏表が書かれた紙の何枚分もある。表裏を一つの形として受け取るには、その紙を透明にするほかはない。書かれた紙を透明にして、裏表に書かれた人生をのぞき込むのが『穴』を読むということではないだろうか。

この本を開いて扉のページを見ると紙質が他のページとは違っている。

薄グレーの透明状で、薄く書かれた表題の穴という文字と作者名が、そのまま裏ページから黒くはっきり見える。この紙だけが透けて見える紙だ。

裏表を同時に読み取るという読み方を実物で表しているようで、この偶然の近似にちょっと高揚した。

まだ子供のいない「あさひ」と、子孫を残すことの気味悪さを語る義兄が透かして読める。無職で居る身の焦燥感も、田舎で選択肢の少ない職種やコンビニに行くのがせいっぱいの行動範囲として描かれ、穴の閉塞感が透かして重なる。それらを、紙を透明にして裏表を同時に読めば、黒い獣の存在も不思議な訳ではない。色は重ねるほど黒になる。

田舎暮らしの具体的描写にひきこまれて、ひとつひとつ「具体」的にあてはめて想像しながら読み終わると、「嫁さん」が就職して「家」になじみ、再スタートを切る。しかし、「あさひ」には、透明な向こうでまた別の物語が「穴」を用意して始まっているのかもしれない。

ありふれたことに見える日常も、その日常の裏に書かれた物語をいっぱいもっているのだ。複雑な人の生き方を、いかに平板な文字面を使って表現するか、作家さんの工夫が尽き

ることではないだろう。そして、作品の描写を透かして見る読み手の視力も、作家さんに期待されそうだ。

読書会は、そういう視力を持ち寄って、見えなかったものが見えるような気分になれる楽しいところだ。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 宗明あさひ夫妻が無機質な都会から夫の実家の田舎に引っ越してからS F的な感覚の生活が展開する。恐らくあさひにしか見えない黒い獣を追ううち穴に落ちる。穴から出てから彼女には考えられない世界を覗くことになる。人間、風習、環境等々…。獣、穴はかのじょにとつての次なる世界の扉だったのか。しかも穴は沢山あるのだ。(Y A)
- ❖ この本の受賞意味が、先生の説明からとてもよく理解できた。現実世界の中で身の置き所のなさを、穴で小説にされ、その変化を聞きながら、私も本当に共感した。自分の人生歴史の穴を整理し次の穴を誰と楽しむか想像したい。(M)
- ❖ 短篇の部類ですが、内容はとても理解しにくいものです。題の「穴」は何だと思うかが大切と思いました。誰にでもあるどこにでもある穴を見つけては如何ですか？(K)
- ❖ 閉塞感が漂い、現実と幻想が入り混じっている物語で、不思議な印象を受けていた。しかし、読書会で、表の人生を書きながら裏側の人生が書かれていて、それを1つの人生として境を透明にして読む手法と聞いて驚き、大変興味深く思った。(Y)
- ❖ 主人公のあさひは、夫の転勤で夫の実家の隣の一軒家で暮らし始める。仕事を辞め毎日が夏休みのようなあさひ、田舎のしきたり、初めての姑との近い関係など表向きは何もない穏やかな日常ののように見えるが生活の変化の中で主人公のあさひが義兄に出会うことで自分の心の裏側(本音)と向き合っている。だれにでもある、生活の変化を「穴」としてとらえた作品だったが、竹原読書会の皆さんの一人一人の方の思いを聞かせていただき、この作品ならではの技法や心の奥深い読み取りを理解でき、すっきりとした一冊となりました。(R)
- ❖ 表装から見開きの透明のような題の書き方から、穴という意味がよくあらわれている。現実が穴になっている幻想だという事に気づかされました。(TK)
- ❖ 作家の想いの二重構造の間・中心を透明にしてみると、「表」と「裏」が見えてきました。重なったものは黒いのだと読書会で教えて(気付かせて)もらいました。(E子)
- ❖ 穴に落ちた事で、日常の空想が交叉してゆき、読書会でそれぞれの感想に違いが多く面

白い作品でした。穴はどこにでもあり、新たな穴に落ちる事で新たな暮らし、新たな変化が起きるのだが、最後姑に似た自分の顔を鏡に見つけた時は、驚きを感じたのか、安堵を感じたのかは、読者により違うと思う。(N 2)

- ❖ 不思議なストーリーが理解できず、もう一回読んだがますます何が言いたいのかわからなかった。人生の表と裏を重ねあわせて透明化する手法と言われても……？
私はいったいどんな穴にはまっているのかなと思いながら、会が終わった。(K T)

『穴』を読んで

第150回芥川賞受賞作『穴』何を読み手に伝えたかったのかと思う作品。わかりにくい。穴におちること、獣はなんだったのか。

田舎の退屈な生活、今まで仕事をもっていて忙しく毎日を送っていたのが、何をしないわけでもないのかもしれませんが、何もすることもなく平凡な生活の毎日。コンビニに勤めがきまりこれからどんな生活になるのかと思います。“徒より高いものはない”という心境ですかね。(M子)

読んでいて、ふと村上春樹氏の『ねじまき鳥クロニクル』の世界を思い出した。似ている。あれは主人公が井戸に入る。この本の主人公、あさひは穴に落ちる。正体のわからない、黒い獣や義兄。現実と妄想の境目の曖昧さ。何かを象徴するような謎の言葉が吐き出され、宙を漂う。村上氏の世界と似たような雰囲気醸し出している。

地中にある穴は、地上とは違う世界であり、別世界につながる出入り口でもあると思う。地上からの緊急避難場所でもあり、隠れ家でもある。そしてその狭い空間にいと、いやでも自分の気配が濃くなる。自分自身の息の音に、溺れそうな感じがしてくる。

「穴」から、私はすぐに「落ちるもの」と連想した。(人によっては「穴」は「掘るもの」だと思うかもしれない。「覗くもの」かもしれない)でも表紙の絵を見て、あれと思った。穴の入り口が下にある。穴に入るためには下から潜る感じになる。本を逆さにすれば、私が思う「落ちる」穴になるが。逆さの穴の絵は、穴の存在は世界をひっくり返すと暗示しているように思えてくる。すべての価値観をひっくり返す力があると。(ちなみに調べると、表紙の絵はパリ、バルセロナ、ニューヨークを拠点にアーティスト、イラストレーターとして活躍するフィリップ・ワイズベッカー氏の作品であった。日常のものをシンプルなラインで描いた作品だそうである。穴ではなく、何かの品物であるらしい)

文章は会話での改行がない。そのためか、あさひの日常が淡々と流れているように感じる。そう、まさに流れているといった感じなのだ、あさひの目の前を。あさひは一步引いて、テレビを見るかのように自分の人生を眺めている。怒りや喜びの起伏がほとんどなく、

あるのはあきらめのような感情。あさひを通じて見える景色は美しくない。どんな場所でも美しい景色はあるはずなのに、それが見えていない。見ようとしな。そして引越してから、いやもしかしたら引越す前から、あさひの中の時間は止まっているのではないだろうか。「様々な予定、納期、ミーティング、給料日、そういうもので時々刻々を刻まないと、時間というものはずりと垂れ落ちてその速度を把握できなくなってしまうものだった」。そして傍らには、目の前にいるあさひと話す時も携帯ばかりいじっている夫。夫婦ともに、共有した空間の中で、共有した時間を生きていない感じがする。

そのあさひの前に黒い獣が現れる。あさひと義兄にしか見えない、獣。獣に導かれ、穴に落ちる。義兄に出会う。そして湧いて出てきたような子供たちと。現実と妄想とをつなぐのは、この獣だ。義兄はその獣に名前をつけろという。ファンタジーの中では、名付けることは重要な儀式のひとつだ。そのものに命を、呪いを与える行為でもある。命名することで、そのものの器を決める。あさひは決められない。義兄は、一度は、あさひにしましょう、と言う。結局その場では決めなかったが、あさひという言葉が出てしまったことで、その獣はあさひになってしまったと思う。黒い獣が掘った穴は、あさひが掘った穴ということになる。

引越す前から、すでにあさひは狭い穴の世界で生きていたのだと思う。でもそれはあさひだけではない。私もきっと狭い穴の中で生きている。誰もが自らの穴を掘り、その中で生きているのかもしれない。そう考えると、あさひは別の穴に落ちることで、今までの自分の穴から出て、新たな穴の世界に入ってしまったといえるのかもしれない。穴は異世界への出入り口、別世界への出入り口でもあるのだから。しかし別の穴が前の穴よりいいというわけではない。そして穴は無数にある。子供たちは言う。「そんなん、この辺、穴だらけじゃあ！」

穴に落ちた後のあさひは、コンビニでバイトをはじめる。少しだけ前に動きだしたような時間の変化に、読んでいてほっとしたのもつかの間、「私の顔は既にどこか姑に似ていた」で話が終わる。ゾッとした。何だか何も変わっていない気がした。一人一人が、それぞれの穴に入っていて、時々移動して、また別の穴に入る。でもその穴は、それ自体がもしかしたらもっと大きな穴の中に入っているだけなのかもしれない。何だか、救われない感じが漂う読後感だった。 (C)

『穴』を読んだ後の率直な感想…… 何か掴みどころの無い、架空と現実の入り混じった物語だと。

宗明、あさひ夫婦が夫の実家の田舎に引越してから始まる。煩わしい生活の中、あさひは土手で黒い獣を追ううち穴に落ちる。穴を出てからのあさひの身辺。

彼女の常識的な世界からは程遠いものに触れてゆく。

隣人、夫の兄、祖父、近所の人々と風習等々。

あさひ自身のこれからの人生に物理的、心理的な変化をもたらし、自身とは異質な人、ものとの共生が生まれてゆくのだろう。恐らくあさひにしか見えていない獣、沢山ある穴が以前のあさひからの成長の扉なのかも知れない。子供たちが「穴はたくさんあるよ」と言っていた言葉が印象深い。誰にでもあてはまるのかも知れない。(YA)

現実と非現実を行ったり来たりしながら、読者を不思議な空間へと誘ってくれ、心地よく読み進めることができました。

著者は、自身が感じたヨメやイエとしての違和感を、不思議空間の義兄に、家制度の中での家族（家長や嫁）としての役割、子孫を残すという視点での生きる価値への異論を語らせます。そして主人公あさひを一度目は「穴」に落ちることで自分の殻に閉じこもらせ、二度目は義祖父の死もあり、夫の家族の一員になったように感じると変化させていきます。

江戸時代の武家階級の家父長制を基に明治時代に施行された民法としての「家制度」は、戦後改正されたものの、特に田舎では生活する人々の心やしきたりに しっかり残り、70年経た今でも地域社会での各家の役割、家庭内の女性の役割に大きな影を残し続けています。

私達は「イエ制度」という「穴」に落ちることの是非だけではなく、「穴」は至る所にあり、知らないうちに「穴」に落ちたり、知らないうちに「穴」からぬけ出たりして日々を生きています。「今を自分らしく生きる」という価値観からみると、家制度の姑ではなく知恵袋の先人としての、姑の顔に似てきたあさひにエールを送りたくくなりました。

作家って、本当にすごい才能だと思います。結婚し 夫の実家で味わう、ヨメやイエ等に対する不思議な感覚。その言葉に著しくくい“感覚”を小説という形にして昇華する才能に脱帽です。(S子)

これまで転々と引っ越しを重ねた私が、出版されてすぐに読んだ時はふんふんなるほど都心から田舎に引っ越してくるとまあ生活はこんなもんでしょう。想像力豊かな主人公なのね。というだけの感想だったのですが、読書会後再々読すると、この小説が何とも不気味に思えてきました。

夫の転勤に伴い田舎に引っ越した主人公は日々ぬるま湯につかったような生活の中で、突然、穴に落ちたと感じた時点から、どうやら異界と現を行き来するようになったようです。常に携帯電話を手放さない夫、美点を挙げる方が簡単というほど出来た姑（振込金額を本当に勘違いしていたのか否かはわからないのだが）、年中水撒きしている曾祖父（すこし老人ぼけ気味だが片足を異界に踏み込んでいるのか義兄の存在は分っている様子）、あまり顔を合わせない舅。対極に義兄、子供たち、主人公が穴に落ちたのを不思議とも思わない世羅さん。子供達は楽々といろいろな穴に出入りするのを楽しんでいるのだが、主人公は一度穴に

落ちたら一人ではなかなか出られない。すでに出来ている穴には落ちるのだが、自分で穴を掘ろうとはしない。そして義兄は穴には絶対入らないという。儀祖父の葬式の参列者の中でいつもの白いブラウスとスカートのままの世羅さんとその横に座る子供。義兄が住んでいるはずの隣の掘っ立て小屋の扉に触れた時に感じた、子供たちの声やざわめき、老婆老爺のしんとした体臭。これらの時空を超えた世界の方がより生き生きとして現実味を帯びていて面白そうだ。最後にコンビニでの仕事を見つけた主人公が、どこか姑に似た自分を見つけたことで、居場所「穴」を見つけられて安堵したのだろうか……。私は恐怖を感じた。(N 2)

◆ 2月課題本 ◆

『長女たち』

篠田 節子／著 新潮社

「家守娘」「ミッション」「ファーストレディ」の3作品が収められている。主人公や環境はそれぞれに違う設定ではあるが、読み終わると、なにか共通するテーマで貫かれている感じがする。それが「長女」ということになるのだろうが、100家族あれば100通りの長女像があるはずで、小説にするからには、その詳細にこだわったとは思えない。

書類上は「続柄 子」と書いても、一般的な会話では、長女、長男、が普通に通用している。今回の課題本が『長女たち』となっているのは、廃止された旧民法での家制度の名残をひきずっている現状を意識させる働きがある。

参加者からの資料として、戦後の民法改正以来の法律や世相の流れをまとめた表を提示されて、問題の多様さをあらためて認識した。

第1話の「家守娘」の主人公たる島村直美は、ヘルパーや家政婦を拒否する自立しない老いた母親と同居している長女だ。ここでは、かわいがられ役の次女に対して、当てにされ頼られる長女を描く。

直美は、認知症の老母にうんざりしている。家族だからできると赤の他人が信じていることは、血縁のしがらみがあるからこそできないと、肉親が介護を背負う苦悩を細かく具体的に述べていく。現実世界からの飛躍はなく、読書会参加者も、似たような話をいくつも聞いてきたと話す。

家守娘の役回りとなった長女は、親のために自分の人生を差し出せるかという個人にとっては厳しい問いを投げかけながら、経済的に困らない結末を記すことによってソフトランディングとなる。

それを受けた第2話の「ミッション」は、同じテーマを、大きなスケールで正面からふりかざしてくる。では、親ではなく他人のためになら自分の人生を差し出せるのか。

「ミッション」とは、目的とか使命を意味する。ここでの長女秋本頼子は、親のために自分の人生を差しだす代わりに、他人のために自分の人生を差しだすべく、ヒマラヤの麓にあるマトゥ村にやって来た。この村では、11年前から居着いた園田和宏医師が4年前に事故死するまで、妻子よりも優先させるが如く崇高な目的、使命としてマトゥ村での保健医療活動に励んでいた。彼は、かつて20代の頼子が進路相談をしたとき、〈「確かにお父さんを一人

にになってしまうかもしれないけれど、君自身の人生なんだよ」 と答えて医師の道を歩く決心をさせた人だ。

〈普遍的な生命の価値と人間の尊厳を信じて園田も頼子も、この村に来た。〉

確かに、二人とも自分の住む世界のミッションを信じて実践していく。だが、その村には、彼らとは対極的とも言える死生観があった。〈かけがえのない人の命が粗末にあつかわれる突然死を容認し、深遠な言い回しで棄民を糊塗する。冷酷な文化だ〉とする園田や頼子の考え方と、村の薬草医が言うような〈「年老いれば人は死ぬ。周りの者の負担にならず、突然死こそが望ましい。しかし、その時すでに新たな生命は育ち、人は自らの生命と引き替えに子供たちに豊か実りと智慧を残していく。」〉と考える文化は、互いに相容れない。

村の通訳は言う〈外国人は、人生を選択するという。僕たちは、使命を果たすために生まれてきて、今、ここにいる。〉と。彼らはそこでの使命を果たすと巡礼に出る。もうその村には帰ってこない。

自分の人生なら、自分で選べる無限の選択肢を持っているのか。他と折り合いをつけなくても思い通りになる人生が選べるのか。「人生の選択」と言われれば考えてしまう。

頼子は、この村に自分のミッション（カタカナで題名を表す意味を感じる）はないと考えて去って第2の物語は終わる。

今、老人福祉とくくられる「老」の内容は、医学や社会構造の問題でもあるが、根本的に人間の老・死をどう考えるかという問いでもある。村を去る頼子が、仏塔にもたれて眠る老いた巡礼者を〈途方もなく安らかな姿だ〉とみる目は、頼子の死生観に揺れがもたらされ、許容範囲が広がることを予想させる。日本に帰って来た頼子は、生きるのも死ぬのもままならず悪戦苦闘する老いた人々の聞き役になれるだろう。

第3話の「ファーストレディ」の松浦慧子は整形外科医院の一人娘だ。30過ぎて母親の介護をする慧子は、自分が結婚して家を出たら、母はどうなるのだろうと思いながら、自分の年齢を考えている。この第3話も、身の回りではよく聞く事柄で、すっきりと解決するものでもなさそうだ。ただ、この作品も、第1話と同様、長女は豊かな暮らしをしていて経済的な制約がない。つまり、3つの話を通じて、老と死をお金で解決する視点を、敢えて外して作品化していると見える。お金があってもなくても、親でも長女でも、老と死はやってくる。究極のところで考えると、どのような死生観（人生観）を持っているかにかかっている。

3話をつらぬく「長女」とは、何だったのか。読書会では「犠牲」と「解放」についてたくさん話した。他からいえば頼れる存在。長女本人から言えば他から頼られる存在。その頼ってくる誰のためなら限りある我が人生を差しだしても「犠牲になる」とは思わないのか。「解放された人生」とは、どんな生き方なのか。

毎月の読書会は、書評のためではなく、言葉を獲得して自分が考え続けるためのものだと思う。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 「長女」とは何、「長女」の意味は？ 三編とも長女と親との軋轢や微妙な関係を描いている。少子化の現在、誰もが長女、長男となり得る。生活の中でギリギリの場面や凄まじいやりとりがあるが、又これも現実である。問題は老いてから起こる。という事は誰も避けては通れない道となる。如何に介護する者が自分を見失わないように生きられるのか、中々答えが出ない難しい問題である。(YA)
- ❖ 三編から成立しています。長女たちがつながっています。心にずしっとくる小説です。今、私達のおかれている状況が手に取る様、描かれています。介護について考えてみましょう。(K)
- ❖ 逃げ場のない親の介護が娘たちの人生を犠牲にしなければ成り立たないという現代の重い問題に焦点があてられている。読書会の中で「犠牲になっていると決めているのは自分。他の誰だったら犠牲と捉えず許せるのか、受け入れられるのか」という問いが心に残った。
医療や予防が発達して、長生きはできるようにはなったが、逆に病む人は増えた。「年老いれば人は死ぬもの」とう文があったが、自然に、周囲の者を苦しめずに生きて死んでゆくことのむずかしさを思う。個人レベルでできることの限界を感じた。(Y)
- ❖ 参加者も多く、いろいろな話が聞けて楽しかったです。物事にどこで折り合いをつけるのか、それから自分の考え次第で犠牲にもなるし解放にもなるのだ、ということを感じました。(MM)
- ❖ 医療と介護とあとつぎの問題で、向きあう現実を考えさせられました。特に2つ目は文化の違う国で、ピンコロがいいのが良い文化というのがあって、昔のうばすて山を思い出しました。死と介護からのがれられない私達です。(TK)
- ❖ 「長女たち」家守娘を読んで、立場的に私は長男の嫁だから「長女」なのか。姑の世話はやはり、長男の嫁、「長女」なのか。姑の世話はやはり長男の嫁＝「長女」と覚悟している自分がいると、読んで感じました。でも、だれかが母の介護をしなくてはならないと思った時、「子ども達が今までお世話になったから、せめて“お礼”を！」という気持ちが働いていることも確かです。
三編とも今の私には重く受け止めるものでしたが、だれかの犠牲ではなく今の自分自身と向き合い、折り合いをつけ、自己決定（小さなことでも）することで、“犠牲”ではなくなるのかな、と思いました。(R)
- ❖ 姉妹の姉、兄妹としての長女、姉と弟の姉、それぞれの立場でありながら、ひとくくりに表現される長女たち。一、三編はそれぞれに身近にあるドラマで面白く読みました。二編は死ぬとはどういう事か、最後の迎え方はどれが一番良いのか、考えさせられる小説で

した。(N2)

- ❖ 一人では生きられないのが人間です。長女であろうが長男であろうが、「我を捨てる」ことなく、折り合いをつけながらつながっていくことが必要であろう。『長女たち』を通して参加者の本音が聞けて楽しかったです。(本の内容は重かったです) (E子)
- ❖ 長女、長男、家に組み込まれた人達を犠牲の解放ととるか、考え方を考える事により、生きる力をつけること。人とつながり折り合のつけ方がうまくなれば、人間の能力は上がってくる。折り合という言葉がとてもうれしかった。今度もよい勉強会でした。(M)

『長女たち』を読んで

家守娘

気持の苦しくなる内容の本です。

現実には起る親と子の関係。娘を通して年老いた母親との生活。介護のため仕事を辞めざるをえなくなり、まっ暗なトンネルに入った様な毎日の生活。世話をしない妹は無条件の信頼と愛情と同情を寄せ、死後に滂沱の涙を流してやる者。きっと年寄りにはその双方が必要なのだろうと思う。自分が実際に手出しをして、24時間くらさないとわからないことがたくさんあり、そうしてこそわかったこと、理解できることが多々あります。

でも生活をし、生きていかなければならない家守娘。他家に嫁いだこの家のもう一人の娘、今後さらに弱っていくであろう母と自分の身の上に、女の人生に必ずしも男は必要ないが、食べていく手段は必要だ。一人の人間として誇りを持ち続けるためにも。

ミッション (使節団)

理想と現実社会のギャップにとまどい、日本をとびだして、ヒマラヤの麓の村、近代医療の恩恵を受けられないような辺境に住む人々は、長い間、薬草や施術、民間の医に頼っていた。長年の伝統医の治療や薬に委ねてきた。長い間行われてきた事を換えることは並大抵の苦労ではない。

父は尋ねた。「親を見捨てて、赤の他人に尽くすのは楽しいか? 尊敬されるのはうれしいか。家族は面白くもなんともない。だれも頼る者もおらず朽ちていく」灰色の斑の物体と化した父。自分はそこから逃げ出した。少しずつ変わっている。種を蒔く人がいる限り。この村の向こうに別の世界があると示してくれた。それで十分さ。

ファーストレディ

職業柄ファーストレディが必要な世界がある。母が拒否した以上、娘が代理を務めるしかない。それ以外にも母の世話、糖尿病の管理。いくら一生懸命に尽くしても、母は好き勝手

な生活を改めることなく、腎臓を悪くし、透析か移植の選択。親から子供の生腎移植はよく聞かれますが、子供から親にはするのはあまり聞いたことはありません。でもこの母は「お父さんの腎臓なんか死んだってもらうのは嫌だ」「弟、泰水のは」「病気でもない体にメスを入れさせて万が一のことがあったら。誰がそんなことさせたいものですか。将来、何の病気にかかるかわからないのに」限界はとうに越えていた。自分でもそのことに気づかなかっただけで。殺すか、逃げるか。

この3の作品、トータルに考えると「長女たち」イコール女。

世話をする者たちの戸惑い、葛藤、苦しみ、殺意、理解、愛情、行動、まだまだたくさんの意味のある考えさせられる物語ですね。現在、今起きている社会現象、自分のこれからの近い未来のうれしくない悲しい生活です。いかに充実した生活を送れるか考えていかねばいけないと思います。自分自身の為にも、まわりの人達の為にも。(M子)

認知症の母親の介護のために仕事を辞めた、直美。母親を看取り、後に医師になったが、父親を孤独死させてしまった、頼子。糖尿病の病識がない母親の世話をし続ける慧子。30代から40代の独身の長女たちが登場する、3つのストーリーである。年老いた両親の面倒をみながら、その死生観、家族・医療・介護のあり方、女性の生き方など、多くのテーマが盛り込まれていて、どの視点からでもいろいろと考えさせられる。独身の娘や息子が抱える介護。今の社会が直面している問題でもある。高齢者関係の仕事をしてきた私は、その経験や知識のせいで、つい余計なことに考えがひっぱられがちになり、この物語の本質への視点が逸れてしまいやすかった。

著者は一体このリアルな物語から、文学として何を言いたかったのか？

(当日の読書会では、きっと話が盛り上がること、間違いなし！その場にいないのが、ほんとに残念・・・)

「娘」と言わず、「長女」と限定したのは、なぜだろう。意外に長女という立場は家族の中であまりクローズアップされてきていないかもしれない。長女と言われたとき、私のイメージは、“親孝行”だ。その一家を陰で支えようとするイメージがわく。“お姉ちゃんがいれば大丈夫”、“しっかりしたお姉ちゃんね”。知らず知らずに小さな頃からそういう役割を、周囲から与えられている気がする。その期待に応えると、喜ばれ、褒められる。自分の居場所は、立ち位置はここだと感じる。そうやって作り上げられてきた、家族の中での役割。それぞれの題名がおもしろい。家守娘、ミッション、ファーストレディ。まさに長女の別名のような。今までの、家という形をつなぎ止め、守ろうとし、そのための使命＝ミッションをこなし、ファーストレディ＝家族の顔、代表となろうとする。

しかし家族の状況が変われば、役割も変わる。支えてくれていた親が、今となっては自分の人生の前に立ちふさがる存在となっていることを疎みながらも、そんな風に思う自分自身も責め続ける長女達の姿は痛々しい。

与えられた役割。そこからの解放。頼子が医療活動をする村では、年を取ると人は巡礼に出るという。「死ななくても、父親、母親、長老、それぞれの役目のいろいろな使命があつて、それを終えたとき、僕たちはようやく自由になる」。「もうだれかの子供でも、夫でも、妻でも、親でもない。役割や立場、背負って歩いた世俗の重たい荷物を返していいんだ」。

「夫でも妻でも村のものでもない。もうそんな役割を果たさなくていい。そうして本来の生を生き始めることが許される」。

使命。ミッション。この物語では、それに対局してあるのが、＜自立＞のような気がする。母親と長女のまるで一心同体のような関係からの＜自立＞。どんなに老いても、娘の人生を支配しようとする、母親の言動。いつの間にか母親の役割さえも自ら担ってしまう、長女。煩わしく思っても、切り捨てられない。そんな母親の生き方さえも、理解しようとし、飲み込もうとする長女達。その姿はけなげでもあるが、その呪縛の強さに不気味さを感じる。しかし同時に、そこに愛も感じる。

そして親達は、長女達の前では老いていくその姿を赤裸々にさらけ出す。その生き方、死に方。遠くない将来の姿として、親達の中に長女達は自分を見ている。

全体的に暗くなる話だが、物語の最後は少し救われる感じがする。＜逃げる＞ことによって、逃げる自分を認めることによって、役割を変え＜自立＞していくであろう長女達の姿を、最後に垣間見た気がするからだろうか。(C)

家族愛という名の下に、生き地獄へと追い込まれていく長女たち。今の日本家族が抱える病理だろうか。

“家守娘”

仲良し母娘だった母が認知症になり、自立した女性だったが介護のために離職した長女直美。長引く介護による心身の負担・経済的不安・逃げられない閉塞感に喘ぐ。その認知症患者の母が犯罪を犯す医療ミステリー。私は家族の中で死をどう迎えるか考え始める。

“ミッション”

仲良し家族の母を亡くし、自分を頼りにする父を一人で死なせてしまったという罪悪感に苛まれる長女頼子。

「病んでいるか健やかかは本人が決めること」という言葉に電撃が走った。多くの人は生老病死に苦しみ不老不死を願う。しかし現地住民は生自体をミッションだと言い老人になると「巡礼」へと旅立つと言う。役割の生から解放され「本来の生」を生き始める。私の目の前には濃い霧が立ち込め、耳には風にたなびく旗の音が絶え間なく聞こえ、頭の中を本来の生（死と隣り合わせの生）を生き始める老人・森敦の『月山』・映画『檜山節考』の世界が吹雪のように吹きすさび舞い上がり渦巻く。高度医療制度への警鐘ではないかと想う。私は家族の中で感謝をしながら最期を逝くためにどんな準備ができるか考える。

“ファーストレディ”

共依存関係の母から「あんたさえ出来なければ」と言われ続けて成長し、糖尿病に苦しむ母から「だれかの腎臓がもらえたら」と漏らした一言に悩む長女慧子。母は一心同体だから娘の腎臓を移植してほしいと望む。追い詰められた慧子は母を殺してしまう前に母から離れていかなければと決心する。車椅子の車輪の跡が平行線を描くように。常に一定の距離を取りながら親娘関係を続けられるように。私は老いても自立（子供に依存すぎるのではなく程よい距離感を保つ）が必要であると考え、日本尊厳死協会に資料申込みをしていた。

著者は「介護が家庭の中に閉じこめられてしまったときに悲劇は起きる」と語る。日本で「安楽死」や「尊厳死」が話題となって久しい。超党派による尊厳死法案（仮称）は数年前年に作成されたものの、拙速を危惧し今国会においても提出されなかった。超高齢化に突入した日本社会の老後について、医療の在り方や社会の意識、行政システム等の協議が早急に重ねられることを願いながら『長女たち』を閉じる。（S子）

長女とは？ 長女の定義は？

三編に別れているが、何れも長女と親との軋轢や確執、微妙な関係のやりとりが描かれている。ハラハラしたりギリギリに追い込まれて凄まじい場面もあるが、母親とは同姓としての理解し合える冷静な目ではあるが、優しさが感じられる瞬間があり、ホッとほしたが、矢張り重くのしかかる現実である。

血のつながった親子といえども、生きてゆく上ではお互いに人格をもった人間同士である。

だからこそ長い人生を重ねた親、ましてや心身が老いてゆく姿を目の当たりに接している娘との間にひずみや葛藤が生じるのは当然と思う。

世話をする側とされる側も、お互いの人間性を失わず、する側の未来と人生が崩れないように、と願うばかりだ。

少子高齢化のすすむこれから誰もが避けては通れない問題となる。（YA）

以前好んで読んでいた作家の作品であること、『長女たち』というタイトルにひかれて参加しました。今回はみなさんからどんな話が聞けるのだろう、とわくわくする気持ちでした。

楽しかったのはもちろんなのですが、作者の意図、それに導くまでのからくりというか計算というか、「このお話はどうしてここに？」と思う作品ももちろん意味があって置かれているということ、そしてそれがあることによってテーマがより引き立つ、ということを感じ

ました。そう思うとただ読むのはもったいなくて、こうして読書会に参加して読み進めることができて幸せです。

介護の話が出たのですが、介護する人が自分の時間や労力を介護される側に提供する、これによって介護が成り立つ。それを犠牲ととるかどうか。介護する人の心の持ちよう次第だということ。犠牲と取ったり、やらなければならないことと考えると、自分を追いつめてしまう。

視点を変える、その犠牲と思っていることから少し距離を置くのも自分を守るための手段なのだ。「犠牲になっていると思う自分は自分が作っている」という言葉が出た時にガーンとききました。今日私が聞くべき言葉はこれだったのかと。

犠牲と解放、折り合いをつける、が今回のキーワードだったと思います。

いろいろな話が聞けましたが、毎回思うのがみなさんいろいろな経験をされての今だということ。素敵に年を重ねる女性に近づけるならば、今自分の前にある悩みや問題にも挑んでやろうと思える有意義な時間でした。ありがとうございました。(MM)

◆ 3月読書会 ◆ 今年の一冊

昨年4月から今年の3月までに読んだ本の中から、気になった本・お薦めの本を1冊選んで紹介するという年度末恒例の3月例会である。

参加者の中には、自称“本中毒”という人もあるくらいで、読まれた本は相当な冊数になることだろう。

それらの中から1冊を選んで参加するのだから、選ぶ理由付けも大変だ。

1人10分を目途に紹介を進めるのではあるけれど、関連本も紹介したくなるし、その本についての質問にも応えなければならない。それに、誘発される話題も出てくる。そういうわけで手持ち1冊ではすまなくなって、時間が気になるのがいつものことだ。

紹介されたのは、文学の常として、人間の観察や深層についての本が多かった。

『人間の煩悩』（佐藤愛子 著）をまず手がかりに始めた。『九十歳。何がめでたい』（佐藤愛子著 小学館）といわれる作者のユーモア精神が好きだという紹介である。人間以外の生き物も「煩悩」をもつのかどうかかわからないが、「煩悩」は人が老いると共に減少していくという“若い人”の期待にもかかわらず、そんなものではないという今回の滑り出しであった。人間関係の本を辿っていけば、痴呆症や家族関係を取り上げた本が出てくる。

煩悩熾盛の人間を映す社会情勢、特に戦争は過去を伝え現在を掘り起こし未来へなすべきことを問う本として何冊か繋がった。「戦争をしてはいけない」という価値観がすべての人を動かしているわけではなさそうな今の世界情勢だ。「今年の一冊」には挙げられなかったが、エニウェトク環礁のルニットドームを表紙にした『ヤマネコドーム』（津島佑子著）を机上に置いている参加者もあった。

児童文学、絵本も挙げられている。絵本は子供の本だという先入観を持つ人もあるが、“たかが絵本されど絵本”である。メッセージの大きさを生活年齢相応に読み深めることになる。挙げられた絵本の作家マーガレット・ワイズ・ブラウンは、他にも邦訳されている絵本が何冊もあり、それについての話はずんだ。

紹介を聞いていると読みたくなる。読んだつもりの本も、そんな風にも読めるのだ、と刺激を受ける。それが「今年の一冊」をそれぞれが持ち寄る楽しさだ。

さて来年度の課題本は、どんなラインアップになるだろうか。読んで聞か、聞いて読むか、スタイルは自由という誰でも参加できる読書会である。

講師 吉川 五百枝

◆ 今年の一冊

書名	著者・編	発行所	発行年
ヘイトデモをとめた街 川崎・桜本の人びと	神奈川新聞 「時代の正体」取材班	現代思潮新社	2016
人間の煩悩	佐藤 愛子	幻冬舎	2016
君の臍臓をたべたい	住野 よる	双葉社	2015
こわせない壁はない 人生が新しくなる33の心得	鎌田 実	講談社	2013
フツの会社員だった僕が、青山学院大学を箱根駅伝優勝に導いた47の言葉	原 晋	アスコム	2015
しんがり 山一証券最後の12人	清武 英利	講談社	2013
優駿 (宮本輝全集 第7巻)	宮本 輝	新潮社	1992
時をさまようタック	ナタリー・バビット/著 小川和子/訳	評論社	1982
ムーンライト・シャドウ (新潮文庫『キッチン』)	吉本ばなな	新潮社	2002
30代記者たちが出会った戦争	共同通信社会部	岩波書店	2016
木暮荘物語	三浦 しをん	祥伝社	2010
長いお別れ	中島 京子	文芸春秋	2015
FUTON	中島 京子	講談社	2003
約束の海	山崎 豊子	新潮社	2014
おやすみなさいのほん	マーガレット・ワイズ・ブ ラウン/文 石井 桃子/訳 ジャン・シャロー/絵	福音館書店	1962
嫌われる勇氣 自己啓発の源流「アドラー」の教え	岸見 一郎 古賀 史健	ダイヤモンド社	2013
梟の城	司馬 遼太郎	新潮社	1999

坂の上の坂 55歳までにやっておきたい55のこと	藤原 和博	ポプラ社	2011
海なお深く 太平洋戦争船員の体験手記	全日本海員組合編	全日本海員 福祉センター	1986
イヤシノウタ	吉本 ばなな	新潮社	2016
おばあさんのしんぶん	松本 春野/文 絵岩国 哲人/原作	講談社	2015

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 私の領域では決して手を出さないであろうと思われる本の紹介が沢山ありました。十人十色と言われますが色々な本にあたる事も大切だと思いました。今後、苦手な分野の本も読みたいです（K）
- ❖ 皆さんそれぞれの「おすすめの本」は読んでみたいと思うのもばかりでした。自分では選ばない本を知り、自分勝手に解釈していた本に新しい発見をしています。（N2）
- ❖ 本日の話題は広く深かったです。私はこの会に出席して、人間の大きなふろこに入ってもらえ、ずい分と人間的に成長させて頂けたことに感謝のみです。これから先を楽しみにしています。（M）
- ❖ 色々なお薦め本が出ていた。内容を如何に自分のものとして読むか行間を読み取れるか。人間の不条理、人間の本質、身の回りのは難しいものだらけ。現在の世界情勢は混沌としている。こういう中であって本から得るものは楽しく得るものがあるかしら。（YA）
- ❖ 皆さんが今年の一冊を紹介して下さり、皆さんが熱を持って紹介されるのを聞いてどれもみな読んでみたくなった。戦争にいつも話が盛り上がり、戦争と経済が結び付いている部分もあり簡単に反対ですまされないむずかしさがあると感じた。（Y）

今年の一冊

ナタリー・バビット『時をさまようタック』

ある偶然から不老不死になったタック一家と出会う、10歳のウィニーの物語です。児童文学ですが、生きること、死ぬことについて、とても考えさせられました。書き出しもすてきです。

「八月のはじめの一週間は、とまった観覧車のいちばん上のシートみたいに、夏のでっぺんにひっかかった時間。長い一年のてっぺんといってもいい。その前の数週間はおだやかな

春から夏にむかうのぼり坂だし、そのあとの数週間は、すずしい秋へむかう下くだり坂だけれど、八月の第一週はじっとしてうごかない。ただ暑いだけ。それにみようにしずかだ。」

読書会の課題本の中では

吉本ばなな『ムーンライト・シャドウ』です。

『近代を彩った女たち』での、渡辺つゆ女の調べ物は、大変だったけど、とてもおもしろかったです。（C）

私の今年の1冊は『おやすみなさいのほん』です。

文はマーガレット・ワイズ・ブラウン、絵はジャン・シャロー、訳は石井桃子です。

特に最後の「ものいえぬ ちいさなもののたちを おまもりください。」ではいつもジーンときます。子供達にとって眠れるのは、夜になったからではありません。何も言わなくても、自分をまるごと受けとめ愛情いっぱいに見守ってくれる人がずっと側にいてくれるから安心して眠れるのです。作品には、子供達が安心して眠ることができる世界が実現し、いつまでも続きますように！という作者のメッセージが込められているように思えてなりません。この作者の想いが私の琴線にふれ、共感し共鳴し共有するのだと思います。

今後、読書会に望む私のミッションは「作品の中に生きる登場人物を深く捉え行動を分析し、作品に込められた作者のメッセージを想像し、それを自分の言葉で表す。そして自分の生き方と照らし合わせて考えてみる」です。私にとって文学は思っていたより奥深く更に奥深く、難解でとらえにくいものなのです。とにかく精進あるのみなのです。皆さん恐れ入りますが、来年度もよろしくお願いします！（S子）

『30代記者たちが出会った戦争 激戦地を歩く』共同通信社会部／編

先の戦争の激戦地…ガダルカナル、インパール、サイパン島、フィリピン・レイテ島、中国重慶、中国華北、アジア太平洋各地、シベリアを取材したものです。

戦後70年を機に昨年若い30代の記者たちが生き延びた兵士から証言を聴き、それぞれの激戦地を巡る。想像を絶する人間性を失った兵士の行動、飢えや極寒の中で兵士たちはどのように戦い、何を思いながら戦い、何故どのように生き延びてこられたのか。

それぞれの地に降り立った記者たちはここから何を学び、何をこれから伝えて行動しなければならないのか、是非若い人たちに読んでほしい。（Y）

